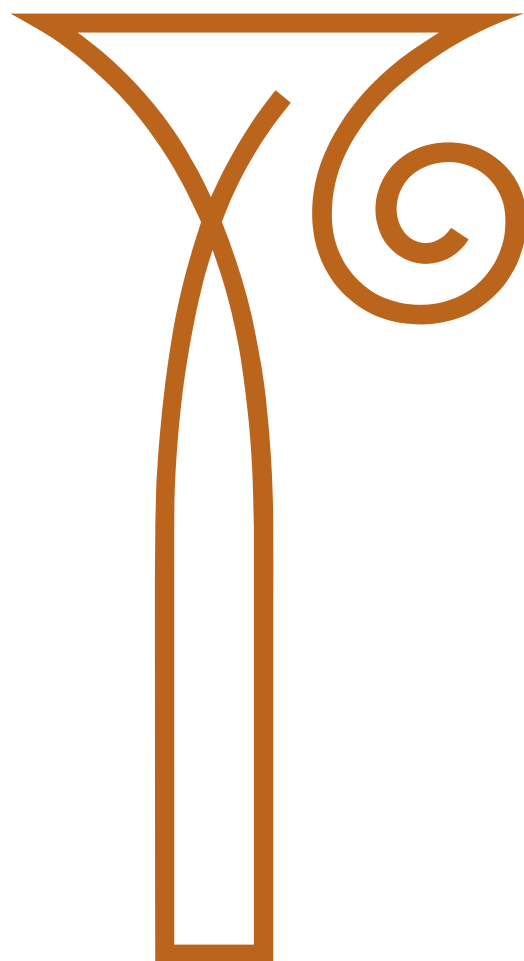


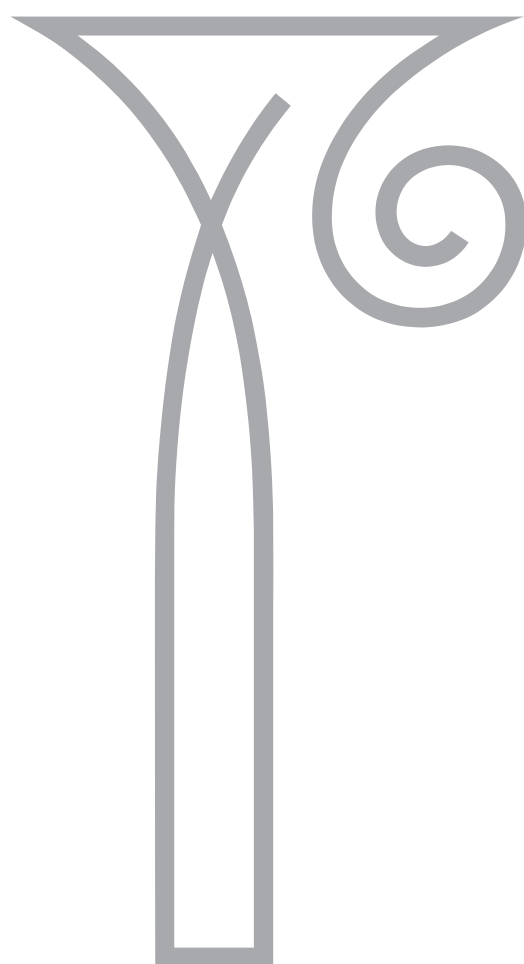
東京都庭園美術館 紀要

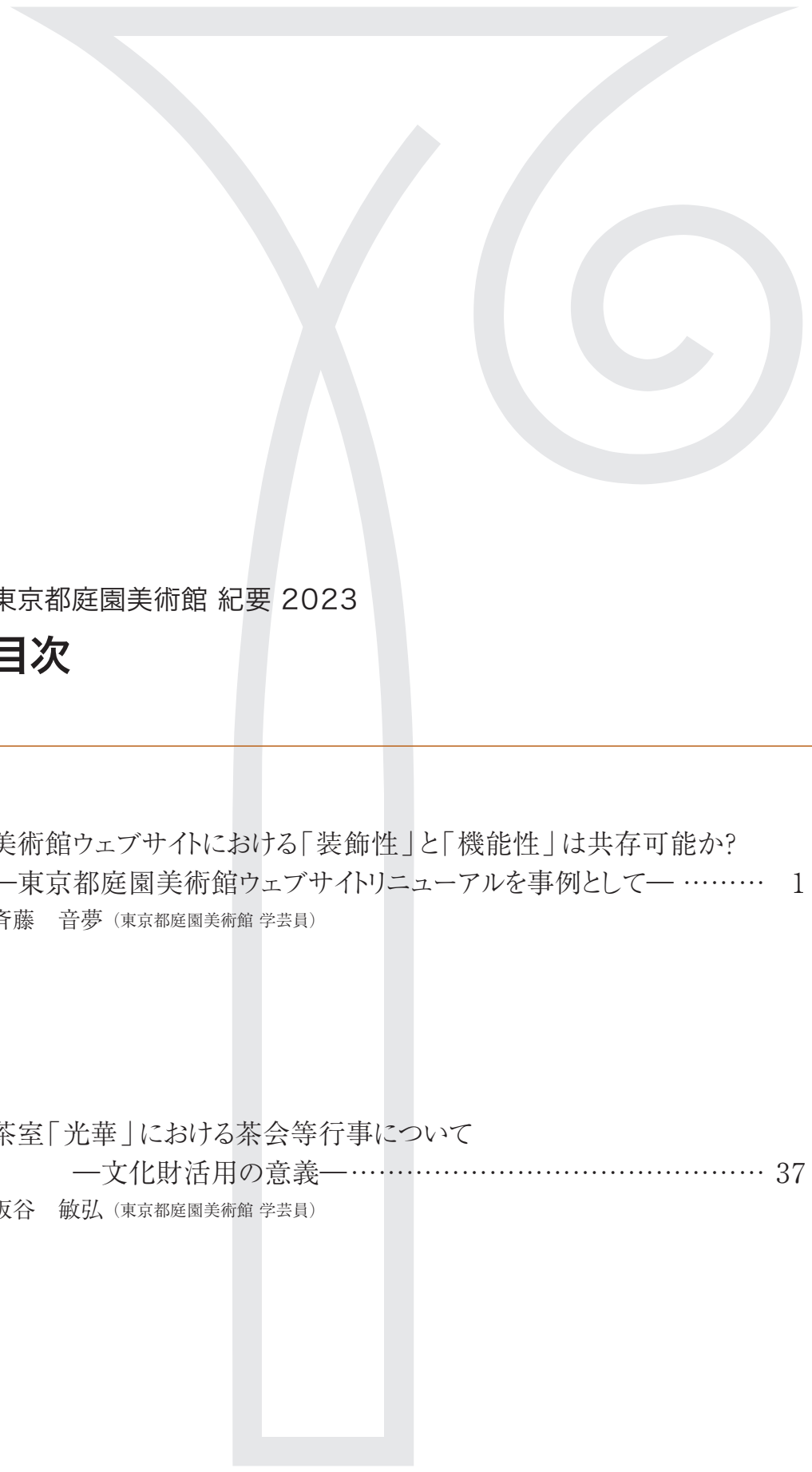
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum
The Bulletin

2023



東京都庭園美術館 紀要 2023





東京都庭園美術館 紀要 2023

目次

美術館ウェブサイトにおける「装飾性」と「機能性」は共存可能か？
—東京都庭園美術館ウェブサイトリニューアルを事例として— …… 1
齊藤 音夢（東京都庭園美術館 学芸員）

茶室「光華」における茶会等行事について
—文化財活用の意義— …… 37
板谷 敏弘（東京都庭園美術館 学芸員）



美術館ウェブサイトにおける「装飾性」と「機能性」は共存可能か？

ー東京都庭園美術館ウェブサイトリニューアルを事例としてー

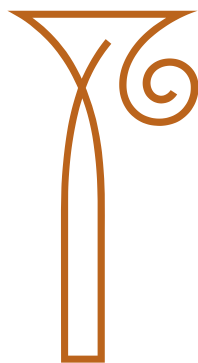
齊藤 音夢

(東京都庭園美術館 学芸員)

Nemu SAITO

Curator

Tokyo Metropolitan Teien Art Museum



はじめに	3
第1章 ウェブサイトの概要	4
第1節 ウェブサイトの変遷	4
第2節 ウェブサイトの構造	6
第3節 ウェブサイトの内容	14
第2章 ウェブサイトリニューアルの背景	17
第1節 顕在化する課題	17
第2節 開館40周年を節目とした改革	18
第3節 情報アクセシビリティへの応答	19
第3章 ウェブサイトリニューアルの流れ	22
第1節 準備と契約	22
第2節 制作と運用	24
第4章 ウェブサイトリニューアルの内容	26
第1節 装飾性について	26
第2節 機能性について	30
第3節 装飾性と機能性の共存	32
おわりに	34
【参考文献】	35

はじめに

美術館を訪れる前に、その美術館のウェブサイトを閲覧する人はどのくらいいるだろうか？おそらく、アクセス方法や開館時間の確認、そしてなにより、今開催中の展覧会はどのようなものが観られるのかを、来館前に公式サイトでチェックする人は少なくないだろう。

東京都庭園美術館（以下、庭園美術館）は、1983（昭和58）年に開館してから、2023（令和5）年10月1日に40周年を迎えた。これを機に、庭園美術館の公式サイトは、これまでのデザインや機能を刷新し、大規模リニューアルを行なった。本稿では、なぜ今回このようなリニューアルを実施するに至ったのかという背景と、そのリニューアルの内容、そしてローンチまでの具体的な流れについてまとめる。さらに、庭園美術館を一事例として捉えながら、「美術館の公式サイトにおいて、装飾性と機能性は共存可能なのか？」という問い、すなわち、「おしゃれで（誰もが）使いやすいウェブサイトは実現できるのか？」という問いについて考察を行う。

昨今、「ウェブアクセシビリティ」は重要なテーマとなっている。その整備や基盤構築のための導入ガイドブック¹をデジタル庁は公開し、達成すべきミッションとして「誰一人取り残されない、人に優しいデジタル化を。」ということを掲げている。たしかに、誰もが使いやすいウェブサイトの実現は、喫緊の課題であり、達成しなければならないことである²。本稿において「機能性」という言葉で概ね示されるのは、このウェブアクセシビリティの拡充ということだ。

一方で、あらゆる人々が使いやすく、利用できるものというのは、汎用性が重視され、画一的なデザインに陥ってしまう可能性がある。初めて庭園美術館のウェブサイトへ訪

れた人に、この美術館の「素敵さ」や「おしゃれさ」を感じてもらうためには、特徴ある「装飾性」も必要なのではないか。

ウェブサイトのデザインにおける「装飾性」と「機能性」という視点で考えたときに、これまでは、どうしても重視する方に偏りが出てしまうことが課題としてあった³。しかし、今回のサイトリニューアルでは、その両輪のバランスを保つための最善の方法を探る、壮大ともいえる挑戦をしている。

本稿では、まず第1章において、庭園美術館の公式サイトの変遷（第1節）や構造の分析（第2節）、ならびに内容の比較（第3節）を行う。

第2章では、サイトリニューアルの背景として、どのような課題があったのかを述べ（第1節）、さらに、どのような点を意識して検討を進めたのかについて触れる（第2節）。同章では、情報アクセシビリティという観点において、国の法整備を踏まえながら、どのように応答していくかという指針について述べる（第3節）。

第3章では、サイトリニューアルに係る作業の流れを総覧し、準備と契約（第1節）、制作と運用（第2節）に分けて述べる。

第4章では、サイトリニューアルの内容について、第1節では装飾性の観点から、第2節では機能性の観点から述べ、結果的に、果たして装飾性と機能性は共存可能なのか、検証と考察を行う（第3節）。

さいごに、本リニューアルを通して見えてきた課題について触れながら、美術館や文化施設をとりまく公式ウェブサイトの未来について、キーワードである「装飾性」と「機能性」の共存という観点から、展望を述べる。

1 デジタル庁は、これからウェブアクセシビリティに取り組みたいと考える事業者向けのガイドブックを、2022年12月5日に一般公開した（最終改訂：2023年11月10日）。デジタル庁、「ウェブアクセシビリティ導入ガイドブック」<https://www.digital.go.jp/resources/introduction-to-web-accessibility-guidebook>（2024.2.25）

2 庭園美術館を運営する公益財団法人東京都歴史文化財団においては、「あらゆる人が芸術文化を楽しめる共生社会の実現」に向け、2023年度から3か年計画として、「東京都歴史文化財団におけるアクセシビリティ向上の取組」の推進を宣言した。本取組における第1フェーズとして目指すべき目標は、「情報サポート」とされ、「情報発信に関わる整備」の実現を目指す。具体的にはウェブサイトの拡充ならびに更新が挙げられる。アーツカウンシル東京、「東京都歴史文化財団におけるアクセシビリティ向上の取組」https://www.artscouncil-tokyo.jp/uploads/2023/12/4_reference-1_231225.pdf（2024.2.25）

3 機能性を重視するあまり、単調で平凡な、おもしろみに欠ける、見ていてグサイサイトになってしまうか、あるいは装飾性を追求するあまり、デザインとはいえ文字が小さすぎて読めない、知りたい情報がどこにあるか見つけられないサイトになってしまうことは、往々にしてある。ジュリア・カセム（2014）によれば、「しかし不幸にも、日本における公的空間におけるユニバーサル・デザインの表現の多くは、建物環境のガイドラインを優先させる官僚的文化により、審美的側面よりも機能性、デザインの卓越性よりもコンプライアンスが全てのレベルにおいて優先されてきた。」とされるように、どちらかといえば日本は、機能性を重視する傾向があり、美しさを追求していくこと、すなわち装飾性への意識は低い、もしくは優先度が低いといえる。ジュリア・カセム（2014）『「インクルーシブデザイン」という発想：排除しないプロセスのデザイン』。ホートン・秋穂訳、株式会社フィルムアート社、p. 96。

第1章 ウェブサイトの概要

第1節 ウェブサイトの変遷

庭園美術館のウェブサイト（以下、サイト）は、今回のリニューアル後のサイトを含めると、大きく4期に分けられる（図1）。第1期は、2005（平成17）年まで運用されていた¹。続く第2期は、2014（平成26）年まで運用されており、こちらは現在でもアーカイブサイト上で閲覧可能である²。その後、第3期は2023（令和5）年9月30日まで運用され、現在の第4期は既述の通り、開館40周年を迎えた2023年10月1日から運用を開始している。

庭園美術館の公式サイトにおいて、ドメイン名³は一貫し

て「teien-art-museum.ne.jp」を使用しているため、サイトをリニューアルする毎に、以前のサイト情報は書き換えられ、更新されてしまう。したがって、アーカイブサイトとして残っている第2期と、運用中の第4期を除いては、閲覧は不可能である⁴。なぜ過去に運用されていたサイトの内、第2期のみアーカイブ化されているのかというと、庭園美術館の長期休館時期とその期間が重なることに起因する。庭園美術館は、2011年（平成23）11月に本館（旧朝香宮邸）の改修及び新館改築のため、長期休館に入っ



図1 (1-1-a)

(左上) 第1期サイト：～2005年まで (右上) 第2期サイト：～2014年まで
(左下) 第3期サイト：～2023年9月まで (右下) 第4期サイト：2023年10月～

- 1 開設は2000（平成12）年9月。2002（平成14）年12月に軽微なデザインの変更があったが、基本的な構造は変更がないので、第1期にまとめる（第2節参照）。
- 2 東京都庭園美術館．「休館中ウェブサイト」<https://www.teien-art-museum.ne.jp/archive/>（2024.2.25）
- 3 ウェブサイトのURLの一部を指し、いわばインターネット上における住所のような役割を果たす。
- 4 アメリカの非営利団体が運営している“Wayback Machine”（https://warp.dandl.go.jp/contents/recommend/mechanism/mechanism_wayback.html）では、過去の当館のサイトでアーカイブされている期間・時点があれば閲覧できるページもある。世界のウェブアーカイブ事情については、国立国会図書館が運用している以下が詳しい。国立国会図書館．「世界のウェブアーカイブ（おすすめコンテンツ）」https://warp.dandl.go.jp/contents/recommend/world_wa/index.html（2024.2.25）

た⁵。そこから約3年後の2014年11月22日にリニューアルオープンをするまでの期間、第2期サイトは情報発信のハブとして機能していた。さらに、同サイトには、1983年の開館時から2011年11月からの休館に至るまでに開催された展覧会情報が、全て掲載されている⁶。現サイトでは、リニューアルオープン後の2011年からの展覧会しか掲載されていないので、開館から現在までの展覧会を総覧するためには、第2期サイトと現サイトの両方を参照する必要があるといえる。

実はこの開館から現在まで開催した展覧会を総覧できる催しを今年度、開館40周年の節目として開催した（図2）。サイト上では、2つの時期にまたがって参照しなければならない40年間の展覧会のチラシを展示し、来場者からは当館にまつわる思い出を募集した⁷。このように、サイト内だけでは十分に情報を得られない場合もあることから、実地での企画も組み合わせて、より充実させたものを提供していくことを重視している。そして、実地開催の様子やレポートを、写真や動画、文書としてまとめ、またサイト内に掲載していくことで、情報の蓄積を図ることができる⁸。



図2 (1-1-b)

「開館40周年記念事業 ウェルカムラウンジ教えてください、わたしのいい日」展示風景

（撮影：大倉英揮）

5 本館改修の主な目的は、文化財としての維持管理を適切に行うため、設備改修や補修工事を実施し、新館改築の主な目的は、美術館としての機能を補完する管理棟の役割を担わせるために実施した。

6 東京都庭園美術館．「過去の展覧会」<https://www.teien-art-museum.ne.jp/archive/exhib/index.html>（2024.2.25）

7 2023年8月11日（金・祝）～9月3日（日）の21日間、正門横スペースにて、「開館40周年記念事業 ウェルカムラウンジ 教えてください、わたしのいい日」を実施した。

8 会場では、実際に来場者に記入いただいた40年間の当館にまつわる思い出メッセージカードも展示していたが、現在はサイト上で掲載し、いつでも閲覧できる。東京都庭園美術館．「ウェルカムラウンジ」<https://teien-art-museum.ne.jp/event/welcomelounge2023/>（2024.2.25）

第 2 節 ウェブサイトの構造

本節では、第1期から第4期のサイトにおいて、どのような構造なのかを分析する。主にサイトマップ¹を参照しながら、それぞれの特徴について述べる。2005 年まで運用されていた第1期サイトのサイトマップは以下である（図3）。

No.	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層	コンテンツ内容
1	トップページ				
2		総合案内			
3			利用案内		開館時間・料金の説明
4			交通案内		
5				マップ	PDFの掲載
6		館内ご注意			
7			館内マップ		各室の平面図掲載
8		ミュージアムショップ			
9			ミュージアムグッズ		
10		カフェ・レストラン			
11			メニュー		
12	ミュージアムニュース				
13		最新ニュース			
14		美術館からのお知らせ			
15		特集			
16	展覧会				
17		現在の展覧会			
18			詳細		
19		過去の展覧会			
20			詳細		
21		年間展覧会スケジュール			
22	友の会				入館割引の説明
23	庭園美術館について				
24		庭園美術館について			
25			施設紹介		設計概要掲載
26			朝香宮邸内装に参加したフランス人		
27		朝香宮家について			
28	庭園案内(美術館の四季)				
29		庭園マップ			
30		庭園だより			
31		庭園フォトギャラリー			四季の庭園の様子掲載
32	付属施設利用案内				
33		新館ホールの利用			
34		茶室「光華」の利用			
35			利用予約検索		未実装
36	フロアガイド				
37		1Fフロアマップ			
38			1F大食堂を動画で見る		IPIX
39			1F次室・香水塔を動画で見る		IPIX
40			1F大客室を動画で見る		IPIX
41		2Fフロアマップ			
42	イベント・講演会				
43		講演会			
44		コンサート			
45	リンク				
46		東京都関連			
47		協力・協賛会社			

図3（1-2-a）
第1期 サイトマップ

1 ウェブページにおいて、内容や構造をリスト化したもの。本稿では、すでに公開されていたものを含めて、筆者により情報を整理し、改変を加えている。リストの項目としては、ページの階層毎に内容を示している。一番右欄には、具体的なコンテンツの内容を示している。

第1期サイトは、2002年12月まで運用されていたデザイン（図4-1）と、それ以降のデザイン（図4-2）に変更があるが、基本的な構造の変更はなく、サイトマップにも大幅な変更は見られない。

ページ数としては、全47ページで構成されており、第4階層までの構造となっている。ウェブページにおける「階層」というのは、大きな情報から小さな情報により細分化していくことを指す。いわば、属性を分けていき、カテゴリ化していくという意味をもつ。たとえば、第1期サイトマップの第2階層にある「総合案内」から、第2階層の「交通案内」を選択し、その後に第3階層の「マップ」を参照することで、段階を踏んで、より詳細な情報を得ることができる。また、第1期サイトは、デザイン変更前の表示言語は日本語のみであったが、デザイン変更後は英語ページが実装されている（図5）。



図4-1 (1-2-b)

第1期サイト：～2002年12月まで運用



図4-2 (1-2-b)

第1期サイト：～2005年7月まで運用

Tokyo Metropolitan Teien Art Museum 東京都庭園美術館	
How to use the museum	
Opening Hours	Daily 10:00a.m.to 6:00p.m.(No admittance after 5:30 p.m.)
Closed Days	Closed on the second and forth Wednesdays of the month (unless National Holidays, in which case, closed on the following Thursday). New Years Season and preparation periods for Exhibitions.
Admission	The cost of admission varies according to the nature of each exhibition.A ticket for admission to the museum also covers the garden. Admission Fees(Garden Only) <1 person> Adult / 200 Adult(Over 65) / 100 Student(College & University) / 160 Student(High School / Junior High School) / 100 Schoolchildren Free <Group> Adult / 160 Adult(Over 65) / 80 Student(College & University) / 120 Student(High School / Junior High School) / 80 Schoolchildren Free *Junior high school students living or attending in Tokyo are free.
*Admission to the museum is free for disabled people and their attendants, and preschool children. *School Children of all ages(in Tokyo) are admitted to the museum free if they are making an educational visit accompanied by a teacher. Please contact the museum office beforehand. *Adult over 65 may enter for free on the third Wednesday of the month. *There is a 20% discount for the membership of associations belonging to the Tokyo metropolitan Foundation for the history and culture. *People living in Tokyo and Accompanying children under 18 could get 50% discount. (Proof may be required.)	

図5 (1-2-c)
第1期サイト：英語ページ

デザインについて、とりわけ変更前と変更後の使用色について分析すると、変更前のベースカラーはホワイトで、メインカラーに灰みのある赤系の色²を使用している。そして、アクセントカラーとして、ブラックを用いているが、メインカラーについては、第1階層のトップページのみに適用されている。たとえば、第2階層の「展覧会」や「庭園美術館について」では、それぞれのメインカラーは、あざやかな青紫系の色³と暗い青紫系の色⁴が用いられており、階層毎に異なっているという特徴がある。一方で、変更後のサイトは、ベースカラーにホワイトを用いているのは同じだが、メインカラーに暗い黄緑系の色⁵を用い、アクセントカラーはあざやかな黄系の色⁶を用いている。

ここで、さきに述べた「ベースカラー」「メインカラー」「アクセントカラー」について、詳しくみていきたい。今回の第

4期サイトリニューアルにあたっては、この3つの色の構成がとても重要であった。それぞれの色がどのような役割をもち、作用しあうのか基本原則を確認していく。

ウェブページのデザインにおいて、上記の3色の配色バランスとして適切なのは、ベースカラーが70%、メインカラーが25%、アクセントカラーが5%であるとされる。ベースカラーはサイト内の基本となる色で、使用量が一番多く、基調色として、そのサイト全体の印象を左右する。続いて使用量が多いのが、メインカラーである。「ベースカラーとの組み合わせでニュアンスを加えたり、イメージの表情を豊かにする色」⁷とされるように、この補完色によって、サイトイメージの方向が概ね固まるといえる。一番使用量が少ないアクセントカラーは、「全体を引き締めたり、注意を引き変化を生み出す色」(ingectar-e 2020: 011)として使用される。他2色とのコントラストがはっきりとしていて、目立たせたい内容などを際立たせるような配色をとる。たとえば、第1期サイトの変更後と変更前のデザインにおける3色の構成(ベース、メイン、アクセント)は、図6のように示すことができる。



図6 (1-2-d)
(上) 変更前：第1期サイト (下) 変更後：第1期サイト

2 カラーコードは「#a06470」

3 カラーコードは「#000090」

4 カラーコードは「#333366」

5 カラーコードは「#628442」

6 カラーコードは「#cdb804」

7 ingectar-e (2020).『見てわかる、迷わず決まる配色アイデア 3色だけでセンスのいい色』.インプレス, p. 011.

No.	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層	コンテンツ内容
1	トップページ				
2		休館に関するお知らせ			
3		美術館について	朝香宮家について		
4			アール・デコ		
5			朝香宮邸のアール・デコ		
6			朝香宮邸内装に参加したフランス人		
7			旧朝香宮邸の歴史を訪ねて		館刊行誌の再録
8				連載・特集[PDF]	PDFの掲載
9			施設概要(東京都庭園美術館・茶室「光華」・1F平面図・2F平面図)		設計概要掲載
10				1F大食堂を動画で見る	IPDX
11				1F次室・香水塔を動画で見る	IPDX
12				1F大客室を動画で見る	IPDX
13			過去の展覧会		ポップアップ表記で詳細記載
14		ワークショップ&トーク 2011-2014			
15			Vol.1 東京都庭園美術館(1)「密度が高くて目が離せない!アール・デコ日仏エンドレスバトル!」		
16			Vol.2 東京都庭園美術館(2)「文化財建造物を見る・診る・看る」		
17			Vol.3 アール・デコでくつろぐ 銀座編		
18			Vol.4 アール・デコでくつろぐ 新橋・日本橋編		
19			Vol.5 ワークショップ「切り紙でつくる『たてもの文様帖』」		
20			Vol.6 ワークショップ「架空のテレビ 小冊子にしてみる」		
21				美術館Blog	
22		邸宅美術館のアートな空間			
23			第1回 原美術館(旧原邦造邸)		
24			第2回 三菱一号館美術館(旧三菱一号館)		
25			第3回 大原美術館		
26			第4回 アサヒビル大山崎山荘美術館		
27			第5回 <海外編>ラ・ビシース美術館		
28			第6回 <海外編>デスピオーヴレリック美術館		
29			第7回 東京ステーションギャラリー		
30			第8回 <海外編>アンパン男爵邸(Villa Empain)		
31		1925 アールデコ博			当館竣工の礎となった博覧会の紹介
32			第1回 『ようこそ!アール・デコExpoへ』		
33			第2回 『フランス大使館 応接サロン』		
34			第3回 『フランス大使館 アンサンブル展示とエントランスホール』		
35			第4回 『フランス大使館 書斎と喫煙室』		
36			第5回 『アンリ・ラバンと国立セーブル製陶所バヴィリオン』		
37			第6回 『コレクシヨヌール館とグラント・サロン』		
38			第7回 『ラリックの噴水』		
39			第8回 『百貨店のバヴィリオン』		
40			第9回 『アール・デコ博覧会公式報告書』		
41			第10回 『ポール・ボワレの川舟バヴィリオン』		
42			第11回 『エスプリ・ヌーヴォー館』		
43			第12回 『ソヴィエト館』		
44			第13回 『オーストリア館とウィーン工房』		
45			第14回 『日本館』(最終回)		
46		フォトギャラリー			来館者から公募した写真を掲載
47			アール・デコフォトギャラリー		
48				バックナンバースト	
49		庭園フォトギャラリー			
50				バックナンバースト	
51		女子に捧げる アール・デコレクチャー			
52		みんなでつくる「たてもの文様帖」			ワークショップの成果紹介
53		(今月の『たてもの文様帖』)		バックナンバー	
54			たてもの文様切り紙指南		
55			発見!たてもの文様 投稿はこちらから		
56			下村葉穂さんインタビュー		
57		美術館からのお知らせ			
58		リンク			
59		プライバシーポリシー			
60		よくある質問			

図7 (1-2-e)
第2期 サイトマップ

2014年まで運用されていた第2期サイトについても同様に、サイトマップ(図7)とデザイン(図8)について分析していこう。構造的には、ページ数が大幅に増えたことが特徴である。第1期サイトが47ページだったのに対し、第2期サイトは60ページになっている。ただし、階層に関しては第1期と同様、第4階層までの構造となっている。ページ数が増えた理由としては、第3階層に位置付けられるコンテンツが、第1期サイトと比べて約2倍の数になったことが挙げられる。第3階層には、美術館の概要に加えて、対談の収録や建物に関するエッセイの連載記事などがみられる。既述の通り、この第2期サイト運用中は、



図8 (1-2-f)
第2期サイトの色の構成

No.	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層	第5階層	第6階層	コンテンツ内容
1	トップページ						
2		美術館について					下層ページへのリンク
3			館長からのごあいさつ				館長交代に伴い未更新
4			旧朝香宮邸とは/沿革				年表形式の記載
5			本館の各室について				本館の各室を写真とともに紹介
6			旧朝香宮邸内装にかかわった人々				
7			設計概要				
8		NEWS					
9			NEWS詳細ページ				
10		展覧会					
11			開催中の展覧会				
12				展覧会詳細ページ			
13				年間予定			年表形式の記載
14			開催予定の展覧会				
15				展覧会詳細ページ			
16			これまでの展覧会				
17				展覧会詳細ページ			
18		来館のご案内(基本情報・チケット・アクセス・所在地/お問い合わせ先・バリアフリーについて・フロアマップ・敷地マップ・鑑賞時のお願い・					下層ページへのリンク
19		ウィンターガーデン見学の注意事項)	団体のご利用・教育活動について				PDFの掲載
20				団体予約申し込みフォーム			
21				入力確認			
22					完了		
23		よくあるご質問					
24		お客様へのお願い					
25		プログラム					
26			すべてのプログラム				
27				プログラム詳細ページ			
28			展覧会関連プログラム				
29				プログラム詳細ページ			
30			ラーニング・プログラム				
31				プログラム詳細ページ			
32			ラーニング・プログラム 活動報告				
33				活動ブログ詳細ページ			
34			パフォーマンス&イベント				
35				パフォーマンス&イベント詳細ページ			
36			これまでのプログラム				
37				プログラム詳細ページ			
38		プレス関係の方々へ					下層ページへのリンク集
39			プレスリリース				PDFの掲載
40			商業目的の画像の利用・撮影について				
41				ロケ撮影			PDFの掲載
42			その他画像利用について				
43			お問い合わせフォーム				
44				入力確認			
45					完了		
46			ユニークベニューについて				PDFの掲載
47		コレクション					
48			コレクション詳細ページ				
49		紀要・年報					PDFの掲載
50		レストラン、カフェ&ショップ					
51			レストラン				
52				レストラン詳細ページ			
53			カフェ				
54				カフェ詳細ページ			
55			ミュージアムショップ				
56				ミュージアムショップ詳細ページ			
57		庭園について					
58		東京都庭園美術館公式アプリ					
59		3Dオンラインビューイング					360° パノラマビュー視聴
60		寄付金のお願い					
61		リンク集					
62		サイトポリシー					
63		ウェブアクセシビリティ					
64	休館中Webサイト						

図9 (1-2-g)
第3期 サイトマップ

3年ほど休館の期間があった。実際に来館することはできないが、サイト上での充実した発信を定期的に行っていた姿勢が伺える。実地での体験が難しい場合は、ウェブサイトというプラットフォームを駆使して、オンラインコンテンツを楽しんでもらうという、相互補完的な役割を担っていた。その他、表示言語については、引き続き英語ページのための実装である。

デザインについては、メインカラーを多用していることが特徴的である。どれも暖色系の色だが、灰みの黄系の色・深い黄系の色・鈍い橙系の色・深い赤系の色など⁸、同系色の色で展開している。アクセントカラーは、使用されているページが限られているが⁹、明るい赤紫系の色¹⁰を用いている。

2023年9月まで運用されていた第3期サイトは、なじみのある方も多いだろう。2014年のリニューアルオープンを機にローンチされた同サイトは、これまでのサイトで初めて、表示言語が日本語、英語に加えて、フランス語、繁体字、簡体字、韓国語の6言語対応となった。ページ数は全64ページで、第2期サイトと同程度のボリューム感といえる。一方で、階層は第6階層まで増えてしまい、深く潜ってページを見ていかなければ、得たい情報に辿り着けない構造となった(図9)。

他方、デザインはダイナミックな構成となった。トップページ上部に、展覧会毎のメインビジュアルを配置し、スライドショー形式を採用している。ユーザーは一目で、今どのような展覧会を開催しているのか把握できるといえる。一方で、色の構成はかなりシンプルだ。ベースカラーのホワイトと、メインカラーのブラックでほとんど構成され、アクセントカラーは、ごくわずかな箇所にあざやかな橙系の色¹¹を用いている(図10)。

さて、ここで各期のサイトが運用されてきた年代の社会的動向について考えてみたい。とりわけ、第2期と第3期



図10 (1-2-h)
第3期サイトの色の構成

は、それぞれ2005年～2014年(第2期)と2015年～2023年(第3期)に運用されてきた。このことは、ユーザーが当館のサイトを閲覧するときに、どのような「端末」を用いていたのかという点で、大きく変化する時期と重なる。

スマートフォンが日本国内に初めて登場したのは、2008(平成20)年頃である¹²。総務省が統計を取り始めた2010(平成22)年から、スマートフォンの世帯保有率は右肩上がり、2020(令和2)年には約8割の世帯が保有している¹³。個人が利用する端末としては、約9割以上の人がスマートフォンを使っているという調査結果もみられる¹⁴。当館のサイトへのアクセス解析を行うと、やはりスマートフォンユーザーが半数以上で、日によっては7から8割程度を占めることもある。これにより、スマートフォン画面での見え方という面で、こういったデザインがふさわしいのかという視点も重要視しなければならなくなった。さらにいえば、画面上の読み込み速度や操作性といった機能的な側面においても、スマートフォンファーストで構築していく必要があり、とりわけ第3期サイトでは、急速に拡大するスマートフォン利用者へのサービス向上のため、既存の運用及びシステム内での試行錯誤を要した。

8 カラーコードは順に、「#b1a282」「#bc9335」「#a98a60」「#b97b57」「#b45e45」

9 「フォトギャラリー」ページのみである。東京都庭園美術館。「アール・デコ Photo Gallery」<https://www.teien-art-museum.ne.jp/archive/photo/artdeco.html> (2024.2.25)

10 カラーコードは「#eb4484」

11 カラーコードは「#eb6207」。なお、図10のトップページ上部には、2021(令和3)年開催の「20世紀のポスター展」のメインビジュアルが配置されている。このメインビジュアルによって、サイトの印象は大きく変わる構造がよくわかる。

12 総務省。「進化するデジタル経済とその先にある Society 5.0」<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd111110.html> (2024.2.25)

13 総務省。「デジタル活用の状況」<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd111100.html> (2024.2.25)

14 総務省。「デジタル利用環境・サービス等の活用状況」<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r03/html/nd111110.html> (2024.2.25)

No.	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層	コンテンツ内容
1	トップページ				
2	検索結果				
3	展覧会(開催中・開催予定/これまでの展覧会)				
4					展覧会詳細
5	美術館・建物(東京都庭園美術館とは)				
6					使命と基本方針(新規)
7					旧朝香宮邸について
8					旧朝香宮邸の歴史を訪ねて
9					旧朝香宮邸内装にかかわった人々
10					土地・建物の沿革
11					館長ごあいさつ
12					コレクション
13					コレクション詳細
14					「I.B.MUSEUM SaeS」と連携
15					敷地・フロアマップ(本館の各室について)
16					本館の各室を写真とともに紹介
17					紀要・年報
18					PDFの掲載
19					出版物(新規)
20					館刊行の出版物を掲載
21	庭園・茶室(庭園について・茶室・庭園の植物(新規)・庭園の地図)				見頃の植物を掲載
22	来館のご案内(本日の予定(新規)・開館時間・アクセス)				本日の予定を掲載
23					チケットの予約・購入
24					年間パスポート(新規)
25					年間パスについて掲載
26					カレンダー
27					バリアフリーについて
28					フラットデーのご案内(新規)
29					フラットデーについて掲載
30					団体のご利用・教育活動について
31	イベント(イベント・コンサート・茶室行事・これまでの活動)				
32					詳細
33	ラーニングプログラム(ラーニングプログラムについて・ウェルカムルーム・スクールプログラム・展覧会関連プログラム・アクセスプログラム・やさしい日本語プログラム・美術館講座・これまでの活動記録)				
34					ウェルカムルーム詳細
35					スクールプログラム詳細
36	ショップ・レストラン&カフェ				
37	お知らせ				
38					詳細
39	プレス情報・商業目的のご利用(プレスリリース・広報用画像一覧・商業目的の利用について)				リリースはPDFを掲載
40	よくあるご質問				
41	お客様へのお願い				
42	寄付金のお願い				
43	サイトポリシー				
44	ウェブアクセシビリティ				
45	プライバシーポリシー(新規)				
46	お問い合わせ(全体お問い合わせ)				
47					確認
48					完了
49	お問い合わせ(団体予約・バス駐車場のお申込み)				
50					確認
51					完了
52	お問い合わせ(都内小中高のバス駐車場のお申込み)				
53					確認
54					完了
55	お問い合わせ(イベント・プログラム参加のお申込み)				
56					確認
57					完了
58	お問い合わせ(広報用画像のお申込み)				
59					確認
60					完了
61	お問い合わせ(ロケーション撮影のお申込み)				
62					確認
63					完了
64	お問い合わせ(ユニークベニューのお問い合わせ)				
65					確認
66					完了
67	お問い合わせ(プレスのお問合せ)				
68					確認
69					完了
70	リンク集				
71	表示エラー404(新規)				
72	休館中Webサイト				

図11 (1-2-i)
第4期 サイトマップ

第4期サイトについては、上述のような利用端末の変化も踏まえて、構築の段階から、スマートフォン利用者にとってよりよい機能とデザインを検討した。詳しい内容については、次節ならびに第4章で論じるので、ここでは、これまで同様サイトマップと使用色を中心に、構造を分析したい。

図11のサイトマップを見ると、ページ数は全66ページと、最大となっているが、階層自体は第4階層までとな

り、スムーズな閲覧の導線を実現している。表示言語については、第3期同様、6言語展開で、英語に関しては、日本語ページのほぼミラーページとなるように整備している。色の構成についてはさらに大きな変更がある（図12）。これまで第1期から第3期まで使用されていたベースカラー、すなわちサイト上で一番使用量の多い色はホワイトであった。一方、第4期サイトでは、ページに近いような、や

や灰色い橙系の色¹⁵を用いている。これは、本館外壁の色をイメージしたものだ（図13-1）。メインカラーに使用している灰みの緑系の色¹⁶も、本館内の壁面や、庭園のグリーンを想起させる意味合いで用いている（図13-2）。

第4章で詳しく触れるが、サイト上でいかに当館の魅力を伝えられるか、という点は、第4期サイトの制作時には大変重視したポイントである。その中で、建築意匠や建物の構造などを取り入れていくことにより、その魅力を表現できると考えた。「装飾性」を重視したのである。このことから、色の構成やコンテンツのレイアウトに至るまで、綿密に構築している。



図12 (1-2-j)
第4期サイトの色の構成（左：PC 右：SP）



図13-1 (1-2-k)
本館の外壁（リシン掻き落とし）

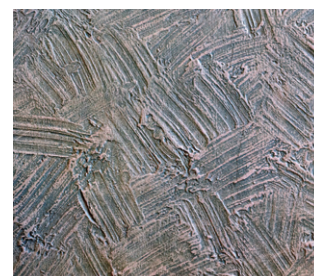


図13-2 (1-2-k)
本館2階の内壁（ラフコート）

15 カラーコードは「#ede8e2」

16 カラーコードは「#7fb9aa」で、アクセントカラーも濃いグリーン系の色を使用している（#01685a）。

第3節 ウェブサイトの内容

本節では、各期サイトにおいて、どのようなページが存在し、どのようなコンテンツを設けているのかについて、特筆すべき点を確認する。

第1期サイトでは、第2階層に「庭園案内（美術館の四季）」というページを設け、日々最新の情報を更新していた。具体的には、「庭園マップ」や「庭園だより」というコーナーがあり、さらに「庭園フォトギャラリー」というコーナーで、植物などの写真を掲載し、リアルタイムで情報を届けていた。このように、庭園の四季の様子を伝えるコンテンツが充実していた点が特筆すべき点である。

続く第2期サイトでは、第2階層の「美術館について」というページが拡充され、朝香宮邸やアール・デコに関する解説がより強化された。これにより、美術館の建築や装飾について、サイトから詳しく情報を得られるようになった。これまで収集・蓄積された資料が、サイトを介して広く公開されるようになったという点が特筆すべき点である。さらに、第2節でも触れたが、開館から2011年までに開催された展覧会のアーカイブが現在でも閲覧できる点や、長期休館時における情報発信の支柱的ハブとして機能していた点も、特筆すべき点である。

次の第3期サイトは、これまでのサイト運用の中で初めて、多言語化ページを設けた点が特筆すべき点である。図9で参照したサイトマップをもとに、どのページが多言語化（英語、フランス語、繁体字、簡体字、韓国語）されたのかを、図14で示している。これによると、多言語化されているページとしては、美術館の概要や来館のご案内、そして、展覧会情報やカフェならびにミュージアムショップなどの付帯施設が挙げられる。一方で、プログラムやイベントなどのページは英語のみの展開となっていたことが伺える。

現在運用中の第4期サイトは、ユーザーのアクセス解析をもとに、「いま知りたい情報」への導線を強化している点が特筆すべき点である。トップページを開いてすぐに、図15に示される全ての内容のアンサーに辿り着くように設計している。さらに、トップページのスライドショー画像をタップすると、それぞれの該当するページに遷移する仕組みとなっている。スマートフォン画面では、気になるものをタップするという操作がごく自然に行われる。そういった観点から、ユーザーの操作性に着目し、たとえば、トップページで美しい庭園美術館の画像が移り変わっていく際に、思わずタップしてしまうと、その画像に関連するページに遷移していくのである。ユーザーの興味関心に沿って、サイト内の回遊を促す効果的な仕組みであるといえる。

ここまで、第1節では各サイトの変遷を整理し、第2節では構造分析を行い、第3節において内容を見てきた。とりわけ、大規模リニューアルを経て現在運用中の第4期サイトについては、過去の3期と比べて、デザインの、機能的に大幅な変更を加えていることが伺える。なぜそのような修正や変更を加えることになったのか、そして、どのような目的でリニューアルを行なったのか、続く第2章で述べていく。

No.	第1階層	第2階層	第3階層	第4階層	第5階層	第6階層	多言語
1	トップページ						●
2		美術館について					●
3			館長からのごあいさつ				●
4			旧朝香宮邸とは/沿革				●
5			本館の各室について				●
6			旧朝香宮邸内装にかかわった人々				●
7			設計概要				●
8		NEWS					英語のみ
9			NEWS詳細ページ				英語のみ
10		展覧会					●
11			開催中の展覧会				●
12				展覧会詳細ページ			●
13				年間予定			英語のみ
14			開催予定の展覧会				●
15				展覧会詳細ページ			●
16			これまでの展覧会				一部のみ
17				展覧会詳細ページ			一部のみ
18		来館のご案内(基本情報・チケット・アクセス・所在地/お問い合わせ先・バリアフリーについて・フロアマップ・敷地マップ・鑑賞時のお願い・ウインターガーデン見学の注意事項)					●
19			団体のご利用・教育活動について				
20				団体予約申し込みフォーム			
21					入力確認		
22						完了	
23		よくあるご質問					
24		お客様へのお願い					●
25		プログラム					●
26			すべてのプログラム				英語のみ
27				プログラム詳細ページ			英語のみ
28			展覧会関連プログラム				英語のみ
29				プログラム詳細ページ			英語のみ
30			ラーニング・プログラム				英語のみ
31				プログラム詳細ページ			英語のみ
32			ラーニング・プログラム 活動報告				
33				活動ブログ詳細ページ			
34			パフォーマンス&イベント				英語のみ
35				パフォーマンス&イベント詳細ページ			英語のみ
36			これまでのプログラム				英語のみ
37				プログラム詳細ページ			英語のみ
38		プレス関係の方々へ					
39			プレスリリース				英語のみ
40			商業目的の画像の利用・撮影について				
41				ロケ撮影			
42			その他画像利用について				
43			お問い合わせフォーム				英語のみ
44				入力確認			英語のみ
45					完了		英語のみ
46			ユニークベニューについて				
47		コレクション					
48			コレクション詳細ページ				
49		紀要・年報					
50		レストラン、カフェ&ショップ					●
51			レストラン				●
52				レストラン詳細ページ			●
53			カフェ				●
54				カフェ詳細ページ			●
55			ミュージアムショップ				●
56				ミュージアムショップ詳細ページ			●
57		庭園について					●
58		東京都庭園美術館公式アプリ					●
59		3Dオンラインビューイング					
60		寄付金のお願い					
61		リンク集					
62		サイトポリシー					
63		ウェブアクセシビリティ					
64	休館中Webサイト						

図14 (1-3-a)
第3期サイトでの多言語化対応ページ



図15 (1-3-b)
SPのトップページの導線

第2章 ウェブサイトリニューアルの背景

第1節 顕在化する課題

本節では、サイトリニューアルを実施するに至った背景について述べる。前章でも触れた通り、サイトを閲覧する際の端末が、パソコンからスマートフォンに急速に変化してきたという社会的要因も含めて、当館サイトにおける顕在化する課題への早急な解決が、第一の背景であった。

具体的な課題のひとつは、前回のサイトリニューアルから約9年が経過しており、既存の運用及びシステム内では、顕在化してきた課題に対応できなくなってしまうことだ。たとえば、サイト全体に使用している文字が小さく読みづらいこと。あるいは、画像ファイルに代替テキスト¹が含まれていないこと。そして、情報が蓄積されていったことで階層が深くなってしまい、スムーズなアクセス導線が機能していないことなどが挙げられる²。また、膨大な情報の蓄積により、ページの読み込み速度が一部遅くなってしまい、ユーザーフレンドリーではない状況を生み出してしまっていた。アクセス解析³からも、サイトを訪れるユーザーのうち、毎月概ね9割が新規ユーザーで、何度もサイトに訪れるリピーターがほとんどいないという結果となった。

ふたつめの課題は、庭園美術館の本館（旧朝香宮邸）の建築意匠の多彩さなど、いわゆるホワイトキューブの美術館ではない「建物自体が美術品」という魅力や、緑に囲まれた四季折々の庭園の魅力が、サイト上からはあまり伝わっていないということである。実際ユーザーが、どのページを閲覧しているかをアクセス解析をもとに検証したところ、多くは「展覧会詳細ページ」と「ミュージアムショップ、カフェ、レストラン詳細ページ」という結果となった⁴。たしかに、美術館の要となる展覧会情報を閲覧してもらうことや、付帯施設の利用促進につながるきっかけとなっている

と捉えることもできる。しかしこれは同時に、本館の歴史や建築意匠、そして庭園や茶室の解説情報といったコンテンツの閲覧は大変少なく、加えて、様々なワークショップやプログラムを実施しているという情報も、ユーザーには伝わっていない（閲覧してもらえていない）という結果を示しているのだ。第1期サイトから、整理・蓄積してきた資料や情報が、単に公開されているだけで、いわば誰の目にも届いていないという状況となっていた。こちらが伝えたい内容と、ユーザーに伝わっている内容に乖離が進んでいき、その要因はサイトの構造やデザインに依るものだと判断される。

上述の課題をまとめると、ユーザー目線においては、機能性やデザイン性、そして情報の整理やスムーズな導線確保という課題の解決が求められていた。翻って、管理者目線での課題もあった。管理者、すなわちサイトを運用する立場において、サイト運用会社の作業を介するものがほとんどであったことから、「更新性」という面で大幅なタイムラグが生じていた。そこで、美術館職員自らが更新できるようにCMS⁵を実装することなど、情報公開の即時性を担保するためのシステム導入も要検討事項のひとつであった。さらに、情報を発信するということに対して、美術館全体で責任をもち、職員一人ひとりが意識を高めていくというきっかけにもなるとして、サイト運用会社への一括依頼ではない方法を探った。

-
- 1 サイト内で表示される画像について、何らかの事情で画像が表示されない時や、読み上げ機能を使って閲覧する時に、画像の内容を伝えるための代わりになるテキストのこと。
 - 2 アクセス解析より、第3期サイトの運用当時（コロナ禍含む）は、チケットの事前予約制を大きく訴求する必要があったが、実際チケットページへの流入率はかなり低かった。
 - 3 本章で参照しているアクセス解析元は、主にGoogle アナリティクスで、第3期サイト運用中の2022年度の任意の月から参照している。
 - 4 しかし、これらのページに辿り着くまでに階層が深く（図14参照、第4階層に位置する）、ユーザーが目的のページに達するまでの導線が適切でないといえる。
 - 5 Contents Management Systemの略。サイト上のテキスト、画像、動画などのデジタルコンテンツを一括管理するシステムのこと。当館の第4期サイトでは、「WordPress」を採用した。

第2節 開館40周年を節目とした改革

東京都庭園美術館は、1983（昭和58）年10月1日に開館し、2023（令和5）年10月1日に40周年を迎えたが、その歩みを少し振り返りたい¹。

美術館としての開館から10年後の1993（平成5）年に、本館（旧朝香宮邸）が東京都指定有形文化財（建造物）第1号に指定される。その後、設備改修や修繕工事などを経ながら、2011（平成23）年に本館の改修及び新館改築のため休館し、2013（平成25）年12月に改修工事完了及び新館竣工となる。この時に開館30周年を迎えている。

2014（平成26）年11月22日にリニューアルオープンを迎え²、翌2015（平成27）年に、本館、茶室、正門、倉庫、自動車庫が国の重要文化財に指定される。

2017（平成29）年には、本館にエレベーターが設置され、翌2018（平成30）年には、西洋庭園、レストランが竣工し、総合開館となる。実は、完成形としての庭園美術館の歩みは、この総合開館を起点とすると、5年ほどしか経っていないのだ。2023年10月1日の開館40周年は、完成形となって初めての周年の節目であるといえる。

第1章で述べた第1期から第3期サイトの変遷についても、その歩みを振り返ると、はじめの第1期サイトは2005（平成17）年まで運用され、次の第2期サイトは2014年までの運用、そして第3期サイトは2023年までの運用である。その移り変わりのスパンは、約9年毎といえる。本章の第1節で述べた、顕在化する課題の早急な解決を急ぎながらも、この開館40周年を節目として、改めて「庭園美術館らしさとは何か？」という探究を深め、その中で、サイトリニューアルを通して、庭園美術館ならではのブランドイメージ³の拡充を図ることが重要であるという意識が芽生えてきたのである。

1 図16に詳しい年表をまとめた。

2 リニューアルオープン後、初めて開催された展覧会は「アーキテクト／1933／Shirokane アール・デコ建築をみる」ならびに、「内藤礼 信の感情」。

3 具体的な内容については、第4章第1節にて述べている。

第3節 情報アクセシビリティへの応答

東京都庭園美術館ホームページは、高齢者や障害者を含む誰もが利用できるものとなるよう、JIS X 8341-3:2016「日本産業規格 高齢者・障害者等配慮設計指針—情報通信における機器、ソフトウェア及びサービス—第3部：ウェブコンテンツ」のレベル「AA」に準拠することを目標とする。¹

上記の宣言は、第3期サイトから現在のサイトまで継続して掲載されている。この規格は、「高齢者及び障害のある人を含む全ての利用者が、使用している端末、ウェブブラウザ、支援技術などに関係なく利用することができるように、ウェブコンテンツが確保すべきアクセシビリティの基準について規定する」（JIS X 8341-3：2016, 1）²のもので、当館サイトはこの規格をもとに一定レベルの基準をクリアしなければならないという大前提がある。この背景には、「誰もが」「全ての人が」という言葉に集約されるように、一人として取り残されない社会の環境づくりや仕組みづくりを進める法の制定が根底にある。

2013年6月に障害者差別解消法³が制定され、2016（平成28）年4月1日から施行となったが、同法の第一条にある通り、障害のある方も、ない方も平等に扱われ、その人権が保障されることで、障害の有無にかかわらず互いに共生できる社会の実現を目指すことが掲げられている。そのような社会実現を可能にするために、一体私たちにどのような責務が生じるのかというと、「社会的障壁」とされるものの除去に取り組みながら、「合理的な配慮の提供」に係る「環境の整備」を行うということである。

「社会的障壁」とは、同法第二条にある通り、社会における事物、制度、慣行、観念その他一切のものを指し、これは大きく4つに分けることができる。第1として、道路

や建物、公共交通機関などを利用する際に、段差や狭い通路のため、通行や利用が困難になってしまう「物理的な障壁」。第2として、教育機会や雇用現場、生活面において、現行の社会ルールのため、能力以前に均等な機会を与えられない「制度的な障壁」。第3として、情報を得る際に、その伝達の仕方が視覚情報のみ、あるいは聴覚情報のみ、もしくは分かりにくい表現のため、必要な情報が均等に与えられない「文化・情報面での障壁」。そして第4として、障害のある方への無関心や無意識、さらに偏見や差別といった「意識面での障壁」が挙げられる。これらの障壁を取り払っていくことを社会的責務とした上で、私たちは個別の事象に取り組んでいかなければならないのである。

社会的障壁の除去を進めるにあたって重要なのが、「合理的な配慮の提供」といえる。なぜなら、障害のある方の個別のニーズに合わせて、可能な範囲で対応や措置をとること（＝合理的な配慮の提供）で、様々な社会的障壁の除去につながるからだ。この合理的な配慮の提供を適切に実施するためには、その基盤として「環境の整備」が必要となる。具体的には、施設内のバリアフリー化や、障害のある方に合わせたコミュニケーションツールの導入、さらには、ウェブサイトにおける情報アクセシビリティ⁴の向上などが含まれる。これらの整備に加えて、職員に対してアクセシビリティ研修を行うことや、施設運用に即したマニュアルの作成なども、整備の一貫となる。上述をまとめると、可能な範囲で環境の整備をした中で、合理的な配慮の提供がなされ、結果として社会的障壁の除去が実現されるのである。

さて、情報アクセシビリティの強化という点において重要な法が、2022（令和4）年5月に交付・施行された⁵。障

1 東京都庭園美術館．「ウェブアクセシビリティ」<https://www.teien-art-museum.ne.jp/accessibility/>（2024.2.25）

2 日本規格協会．「JIS X 8341-3：2016」https://webdesk.jsa.or.jp/preview/pre_jis_x_08341_003_000_2016_j_ed10_ch.pdf（2024.2.25）

3 「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（平成25年法律第65号）は、2021（令和3）年5月に改正され、改正法は2024年（令和6）年4月1日から施行される（令和3年法律第56号）。主な改正点は、事業者（国、独立行政法人等、地方公共団体及び地方独立行政法人を除く、商業その他の事業を行う者）の、社会的障壁の除去並ならびに合理的配慮の提供について、努力義務から「義務」へと変更された。

4 本稿では、「ウェブアクセシビリティ」という用語を、「ウェブサイトにおける情報アクセシビリティ」と同義として用いている。ウェブアクセシビリティの概念については、以下が詳しい。アライド・ブレインズ編（2008）．『Web アクセシビリティ JIS 規格完全ガイド 改訂版』．安藤昌也監修．日経 BP 社，pp. 8-17.

5 「障害者による情報の取得及び利用並びに意思疎通に係る施策の推進に関する法律案」（令和4年法律第50号）

害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法案では、いわば、障害のある方も、ない方も、タイムラグなく均質的に情報を取得・利用することが求められている。この責務に対して、美術館サイトも例外ではなく、むしろ情報取得の面で大変重要な役割を担うものである。たとえば、当館のウェブサイトは、最新情報の発信において要となるもので、各種コンテンツ（アクセス方法やフロアマップ情報など）の掲載ツールとして機能している。さらに、申し込み制のイベント実施の際は、申請受付フォームの設置場所であること、そして何より、展覧会チケットの事前購入窓口としても機能させていることは、重要な点だ。すなわち、美術館をとりまく環境全体をみても、公式ウェブサイトのプレゼンスは非常に高いのである。

ウェブサイトのプレゼンスの高さという側面について、もう少し詳しくみていきたい。これまで述べてきた美術館をとりまく環境の整備として、物理的な側面、すなわちハード面における設備の増強も、もちろん重要な点である。本章第2節でも述べたように、当館においては、2017年に本館エレベーターが設置され、その他にも多機能トイレの整備や、館内および庭園⁶のバリアフリー化など、様々な物理的側面における環境整備を行ってきた。しかし、その整備には工事のための長期的な休館を必要とすること、さらにユニバーサル・デザインの観点から、想定されうる全ての利用状況⁷に対応する機能を盛り込むことなど、設置者側においてクリアすべきポイントが多いともいえる。

他方、ウェブサイトにおける各種コンテンツは、ユーザー側において、その享受内容を変えることが可能だ。すなわち、視覚障害のある方でも、PC-Talkerといったスクリーンリーダーを用いれば、サイト上にあるコンテンツを読み上げて理解することができる。サイト内の色調や文字サイズが適切でない場合は、デバイス上で設定の変更や調整をしたり、「支援技術」とされる補助システムを駆使して、すでにあるコンテンツを自由自在に享受することができる⁸。

物理的な設備は、それを現に作らないと利用できないが、ウェブサイトは、そこにあるだけで、一定の状況が整っている人々にとってはアクセシブルに利用できる。このことは、やはりウェブサイトのプレゼンスを高めており、だからこそ、ウェブサイトにおける情報アクセシビリティの向上は、重要な責務なのである。

これまで述べてきたとおり、当館サイトにおいて顕在化する課題や、法整備をはじめとする社会的動向を踏まえても、ウェブサイトの拡充や更新は、情報アクセシビリティの基盤ないし環境の整備という面で、重要となることが理解できる。この理解の上で、サイトリニューアルに着手する際に、基本となる観点として、以下の事項が見えてくる。

- ① ウェブサイトにおける情報発信ならびに情報公開の即時性を担保することによって、結果として、ウェブアクセシビリティの拡充につながる。
- ② ユーザーフレンドリーとインクルーシブデザイン⁹の考えの下、ウェブサイトにおいて、どのようなデザインを以て作用させるのが望ましいか、求められるか、適切か。

前者において、具体的には、サイト管理者に美術館職員を想定し、CMSの導入などによって、即時的な更新を可能にしていくことを目標としている。後者においては、誰もが使いやすい機能性をもちながら、一方で庭園美術館ならではの魅力を伝える装飾性を両立させ、且つそれが適切であることを目標としている。そのためには、制作の段階からウェブアクセシビリティに係る専門業者と協同し、障害のある方々の当事者チェックを重ねながら、ローンチまでにフィードバックを重ねていくことが重要だと考えた。

次章では、本章で述べた制作目標をもとに、どのようなロードマップで実際のリニューアル作業を進めたのかについて述べる。

6 庭園美術館の庭園には、「バリアフリー園路」が設けられ、ベビーカーを利用する方や車椅子を利用する方が、通行しやすいルートを整備し、さらに庭園マップ（配布物）ならびにフロアマップ（ウェブサイト）にて、そのルートを示している。東京都庭園美術館「敷地・フロアマップ」https://www.teien-art-museum.ne.jp/museum/floor_map/（2024.2.25）

7 車椅子を利用する方、乳幼児をお連れの方、オストメイトの方、同伴が必要な方などに、全て対応できる機能を有さなければならない。

8 支援技術の種類や利用状況については、以下が詳しい。伊原力也他（2023）『Web アプリケーションアクセシビリティ：今日から始める現場からの改善』、株式会社技術評論社、pp. 508-551。

9 ジュリア・カセム（2014）によれば、「インクルーシブデザインは人間の多様性の容認と理解に基づいている」（2014:119）とされ、インクルーシブデザインのアプローチの根底として、ユーザーを中心とした考えがあるとされる（同:117）。今回のサイトリニューアルでいえば、制作段階で幅広いユーザーからのニーズを取り込み、デザインへのアプローチをすることで、インクルーシブデザインの推進を図ることを目指した。

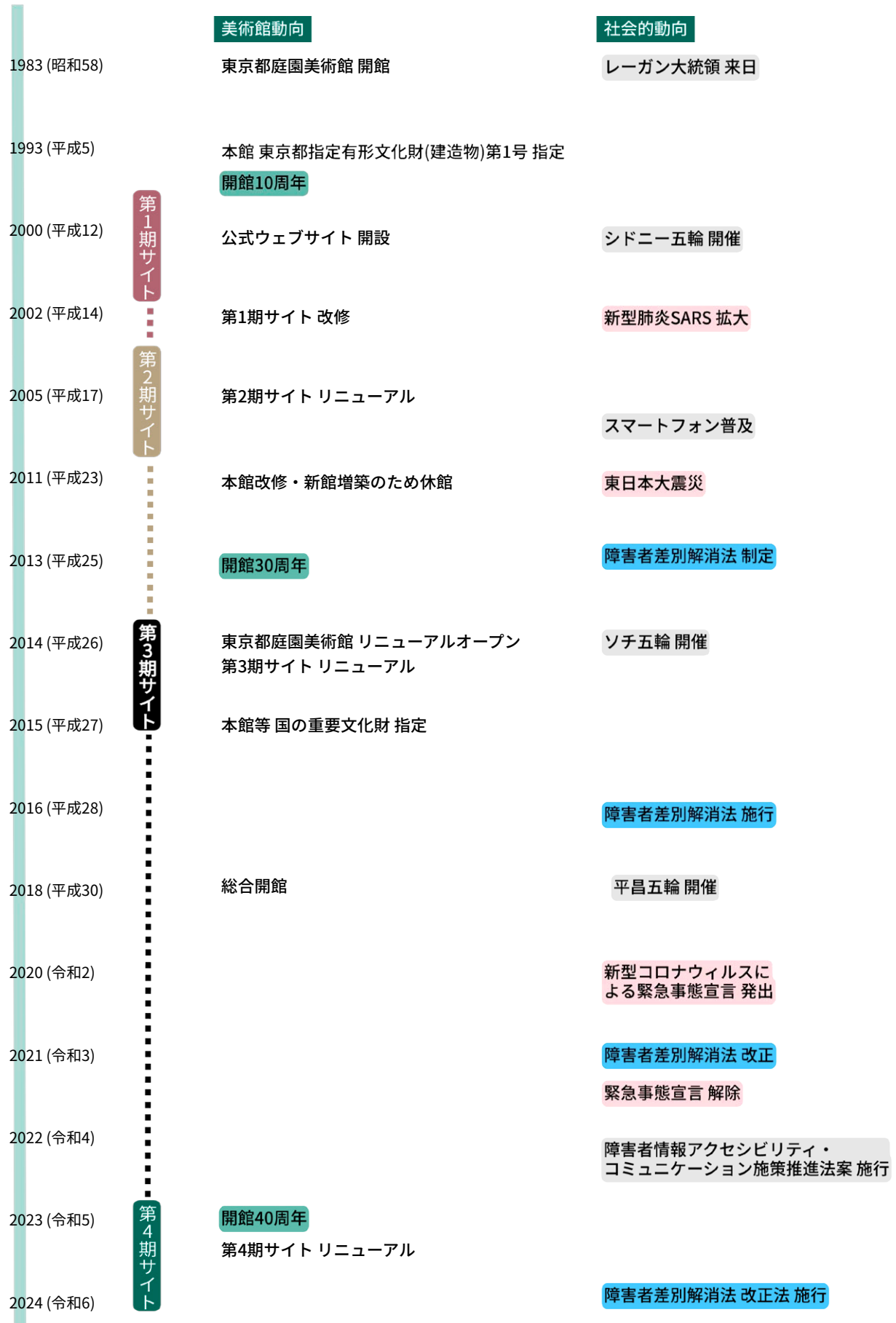


図16 (2-3-a)
サイトリニューアルとそれに伴う美術館動向及び社会的動向

第3章 ウェブサイトリニューアルの流れ

第1節 準備と契約

前章において述べた、サイトリニューアルの背景としての顕在化する課題や、情報アクセシビリティへの応答という点をもとに、当館として目指すべき指針がみえた。リニューアル作業の進め方や、判断材料が出揃ったところで、具体的なローンチまでの流れをみていこう。図17においてスケジュールの詳細が確認できる。

リニューアル作業を進めるにあたって、最初に行ったことは、内部の美術館職員へのヒアリングである。当館で働いてきた年数も経験も異なる様々な職員ひとりひとりに、まずは率直なサイトの印象や、改善してほしい点などを募った。このヒアリングの実施前後において、アクセス解析の分析や国内外のウェブサイトの調査をもとに、ある程度サイトの課題点などの洗い出しを行った上で、リニューアル担当者が盛り込みたい内容や修正したい点などの方向性を明示できるように整えた。具体的には、新規コンテンツとし

て作りたいページを加えたサイトマップの検討や、建築意匠をどう組み込んでいくかといったデザインの検討など、要件定義のラフの構想といったものだ。おおよそローンチの1年前からそのような作業に着手し、備えていた¹。

今回のサイトリニューアルにあたっては、3つの契約の締結によって進められた。コンサルタント業務契約、サイト制作契約、そして、アクセシビリティ診断契約だ。本リニューアルでは、サイト制作会社の選定について、企画コンペ形式を採用した。それに先立って、提案依頼書や募集要項、想定サイトマップの内容など、専門の見地からのアドバイスをふまえた内容にしたいと考え、コンサルタント業務を依頼した。サイト制作にかかるシステム面や費用面の妥当性についての知識が不足していたため、このような手段を選択した。実際、準備の段階で構想していたラフ案を、提案依頼書に落とし込む際には、専門業者のアドバ

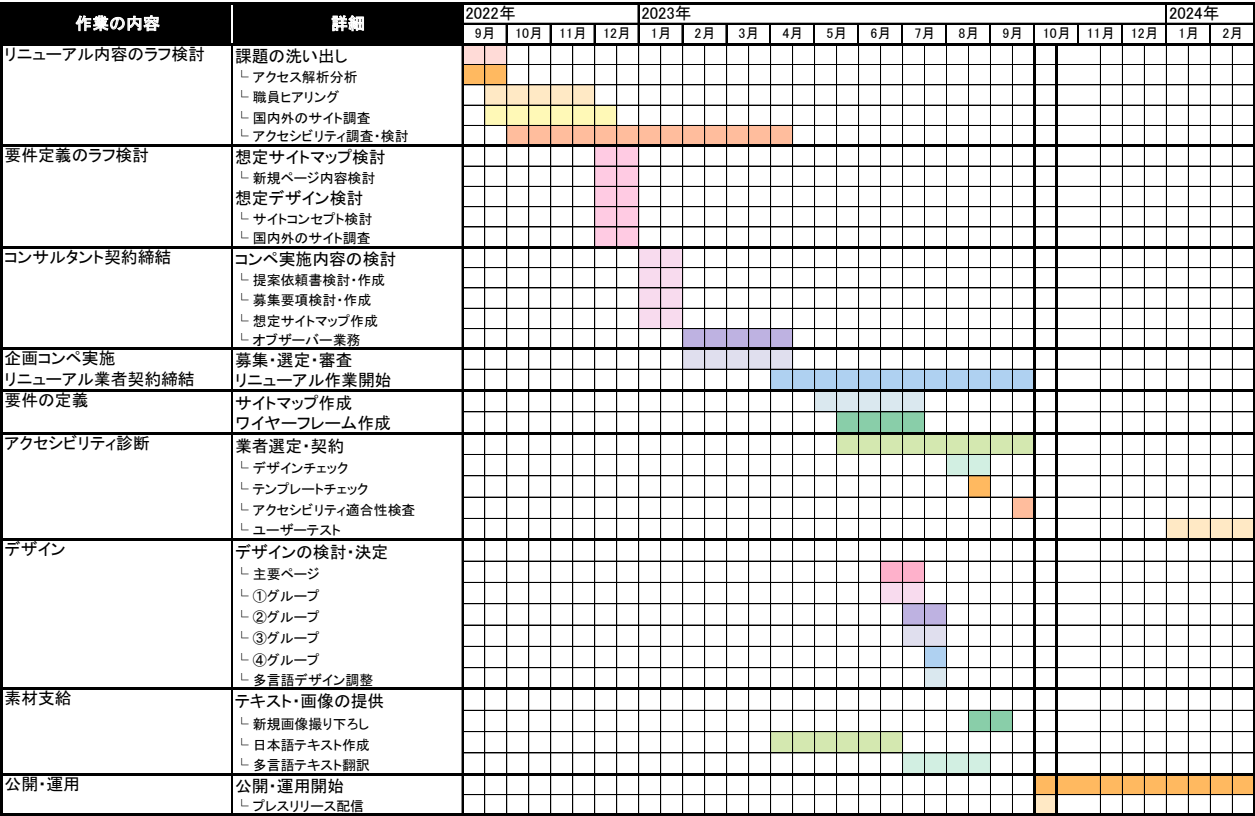


図17 (3-1-a) サイトリニューアルに係るロードマップ

1 第1章第2節にある図11「第4期 サイトマップ」内で、橙色にハイライトをしたページが新規ページである。

イスなしには、示すことができない内容も多かった。特に、第2章でも述べたように、第3期サイトに顕在化していた諸課題に関しては、数値をもとに分析結果を提示し、この改善のためにはこの施策が必要である、という具体化するところまでが必要であった。加えて、職員ヒアリングで募った内容を精査し、どこまでが技術的・費用的に実現可能なのか、基準点を設けて判断していくことも、この段階で行った。このような点から、これからサイトを制作する立場の方々に、私たちが目指すリニューアル像を淀みなく伝えるための媒介者として、コンサルタント業者は重要な役割を果たすものであった。

アクセシビリティ診断業者との協同も、ウェブアクセシビリティの向上を目指すためには必須のことであった。どのように制作の段階から協同していけるのかを考察するところからのスタートだった。結果として、JIS規格²に沿った適合性検査を、段階的に分けて専門業者に依頼し、彼らの評価をもとに改修を行った。詳しい内容は次節で述べるが、サイトローンチまでに、必ず適合性検査をクリアしなければならないという要件があったため、そのような手段を選んだ。

2 第2章第3節参照。

第2節 制作と運用

制作会社との実働に入ったのは、2023（令和5）年4月初頭からであった。サイトのローンチは、開館40周年にあたる10月1日を目標としていたことから、実質6ヶ月間で制作することになる。最初に行ったのは、要件の定義で、サイトマップやワイヤーフレーム¹の作成であった。サイトマップに関しては、準備の段階から少しずつ固め始め、提案依頼書の作成時には概ね出来上がっていた。しかし、改めてサイト内におけるコンテンツの「導線」と「グルーピング」という点を考えた時に、確定に時間を要した。理由は、とりわけ教育普及事業など、過去の膨大なプログラムがあるものは、グルーピングや見せ方が不明瞭になってしまい、その整理が必要であったからだ。差し当たって、コンテンツ自体の質と量については、これまでの各期サイトの充実した蓄積があったので、新規コンテンツの検討やそのページへの導線というよりは、上述のような、たくさんのコンテンツの交通整理やすみ分けといった側面に、考慮の時間を要したといえる。ワイヤーフレーム作成に関しては、サイトマップ作成と並行して行い、概ね固まってきた段階で、デザインの検討へ移行していった。

上述のとおり要件の定義を経て、デザインの検討に進んだが、これと並行してアクセシビリティ診断に係る作業も行なうことになる。デザインの検討ならびに確定は、主要ページと、その他4つのグループに分けて進め、主要ページの方向性の確定を優先して行った。なぜなら、トップページや展覧会ページといった全体のトーンアンドマナーの方向性に大きく関わるものを主要ページとして、色の構成からフォントに至るまで、この段階で決めるための判断材料には、ウェブアクセシビリティの観点も含める必要があったからだ。アクセシビリティ診断業者による「デザインチェック」及び「テンプレートチェック」という適正検査²を受けながら、フィードバックを踏まえて改修を進めていった。最終的に、ローンチまでにはJIS規格における適合性検査の合

格をするということに照準を当て、デザイン調整を進めていくことになる。この最終関門である適合性検査は、9月19日から開始し、9月27日の時点で適合率は90%程度であった。その後、改修を経て、晴れて9月29日に適合率100%となり、基準としていた適合レベル³に達することができた。

サイトマップやワイヤーフレーム作成の段階もそうだが、おおよその方向性が確定する前に、美術館内部でのコンセンサスをとっておくことも重要である。本リニューアル作業の流れの中でいえば、要件の定義の際に、内部での意見交換を行い、細かにデザインへ反映していく形をとった。

制作の段階で、重要な作業のひとつに、素材の支給がある。サイトに反映するテキストや画像といった素材については、美術館からの完全支給のため、デザインに組み込ませる、あるいは調和させるための要件を制作会社と確認しながら整える必要があった。特に画像に関しては、スマートフォンとパソコン画面において表示される画像の適正サイズがそれぞれ異なるので、構図なども含めて綿密に揃えることが要された。時間的、予算的な制約もあることから、すでにある素材でまかなったものも多かったが、たとえばトップページに恒常的に掲載されるスライドショーなどは、新しく撮り下ろしたものを活用した。

様々なフェーズを経て、制作作業は進められたが、ここでひとつ重要なことを学んだ。それは、「イメージする力、想定する力」が強く必要とされていることだ。制作の段階で、どれほど運用時の想定が出来ているか、という視点は非常に重要である。たとえば、イベント・プログラムなどの申し込みに関して、申し込み用フォームのフォーマットを構築するときに、申請者が回答する内容（氏名・アドレス・学年など）に漏れがないかなど、あらかじめ想定される全ての状況を、その構築の段階でイメージできなければ、運

1 ウェブページ構築における、ページの枠組みや動線のこと。制作段階におけるいわば設計図を指す。

2 とともに検査期間は、第1回が2023年8月14日～2023年8月20日で、第2回が2023年8月14日～2023年8月27日。各検査の適合率は平均して、第1回が81%、第2回が71%であった。最終の適合性検査合格に向けて、どういった点を改善すべきかという具体策がここで明示されたといえる。

3 適合レベルには「A、AA、AAA」がある。当館は「AA」レベルをクリア基準としていた。詳しくは、既出のデジタル庁「ウェブアクセシビリティ導入ガイドブック」p. 18を参照のこと。

用時によりフォームを用意しておくことができない⁴。他にも、各ページ間の相関図をあらかじめ考えておき、ページ内での相互リンク挿入を充実させることなど、先回りしてイメージすることで、より充実したページになるといえる⁵。

晴れて10月1日に無事サイトがローンチされるが、運用を開始するにあたって、全職員に向けて、リニューアルサイトに係る説明会を開催した。新しく導入したCMSの使い方や、サイトの構造、そして、デザインのポイントについて述べつつも、このウェブサイトは、ウェブアクセシビリティを重視した内容となっており、その継続のためには、職員ひとりひとりが意識をもって運用に携わっていくことが必要であることを伝える機会となった。

それでは、上述のような制作の流れを経て完成した新サイトについて、次章で詳しくみていこう。

4 展覧会詳細ページにおいても同様に、想定される全ての情報（巡回展情報・グッズ情報・作家プロフィールなど）を、まだ全貌が見えていないデザインの枠組みの中で、決め込んでいかなければならない。実際、作品リストの掲載は、具体的な想定から漏れていたため、現行では、既存のフォーマット内で試行錯誤する他ない状況となっている。

5 アクセシビリティ診断の一貫で当事者チェックを行った際に、「バリアフリーについて」というページ内に、関連する「フロアマップ」ページのリンク挿入がなかった点を指摘いただいたことが挙げられる。

第4章 ウェブサイトリニューアルの内容

第1節 装飾性について

庭園美術館の実際の建物内にあしらわれた装飾が、ウェブサイト上で、どのように取り入れることができるのか。そして、ユーザーにとって、心地よいデザインとは、どの程度まで飾り、あるいは除くことが最善なのか。このような考慮の下、本サイトリニューアルにおいて最大の目的のひとつである、いかに庭園美術館の魅力をサイト上で伝えられるかということを、実際のサイト内にあしらわれた装飾をみながら、紐解いていく。

トップページには、様々な建築意匠を採用している。図18を参照されたい。

①から⑥に振られたモチーフの基となった建物の装飾については、順に次の通りだ。まず、①は本館運転手室の丸窓をモチーフとしている。②は、本館大客室にあるマックス・アングラン（Max Ingrand, 1908-1969）¹作のエッチングガラス扉をモチーフとしている。③は、本館廊下にある、臣下廻り²との境目の両開き扉の鋳物をモチーフとしている。④は、本館正面玄関にあるルネ・ラリック（René Lalique, 1860-1945）³作のガラスレリーフ扉をモチーフとしている。⑤は、本館妃殿下居間にある、ラジエーターカバーをモチーフとしている。⑥は、本館第二階段の手摺りの鋳物をモチーフとしている。実際の建物の装飾については、図19にまとめた。

1 フランスの画家、ガラス工芸家。

2 事務官や身の回りの世話をする人々が使用するスペースのこと。

3 フランスの宝飾デザイナー、ガラス工芸家。



図18 (4-1-a)
トップページにあしらわれた装飾

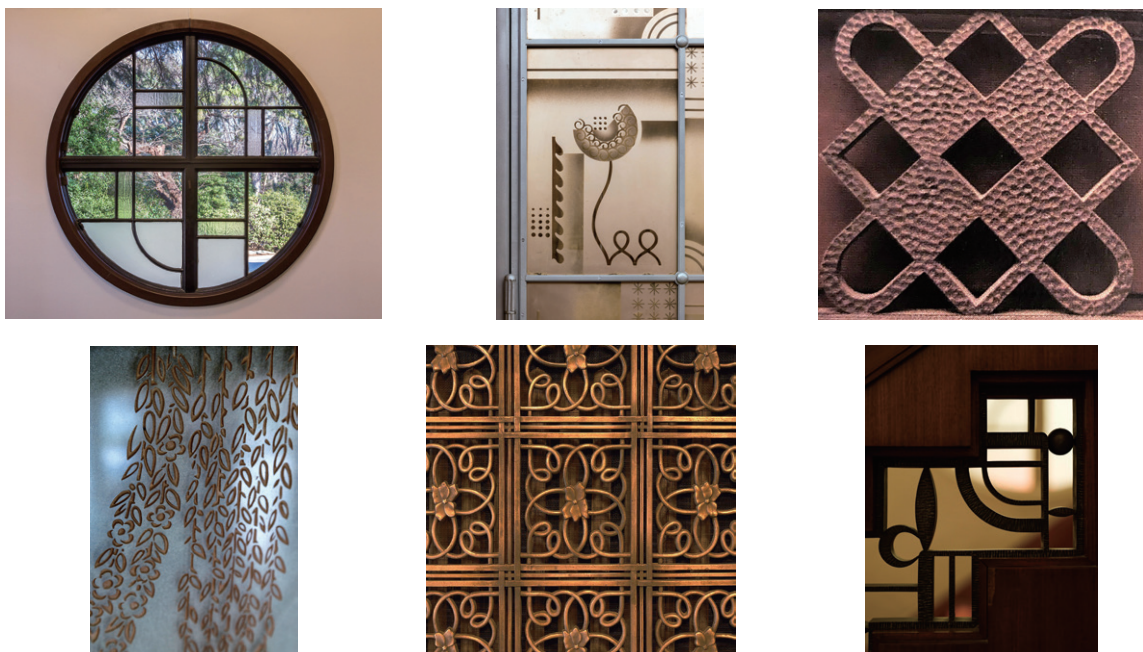


図19 (4-1-b)
上段左から順に、①②③ 下段左から順に、④⑤⑥

このように、実際の建物内でも細部に見出せる建築意匠を、サイト内の細部にも同様に組み込ませることで、実際の建物との連なりや、デザインとして調和させるように心がけている。装飾を装飾としてあしらう、という基本的なトーンアンドマナーの中で、翻ってダイナミックにデザインした部分がある。それは、建築の構造や空間の特徴を取り入れたことだ。たとえば、図20に見られるような、アーチ型の建築や階段の段差は、トップページのスライドショー画像を実装しているデザイン部分に見出せる。

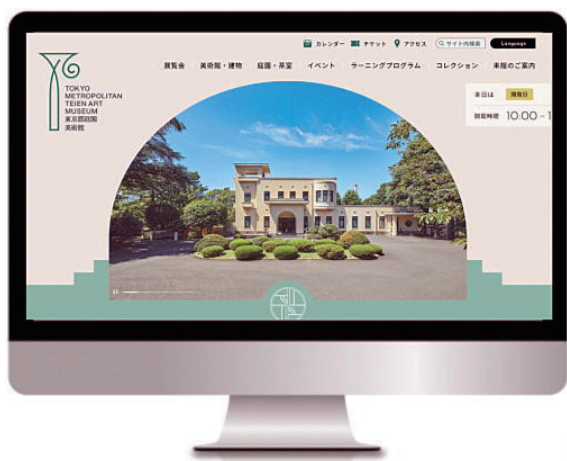
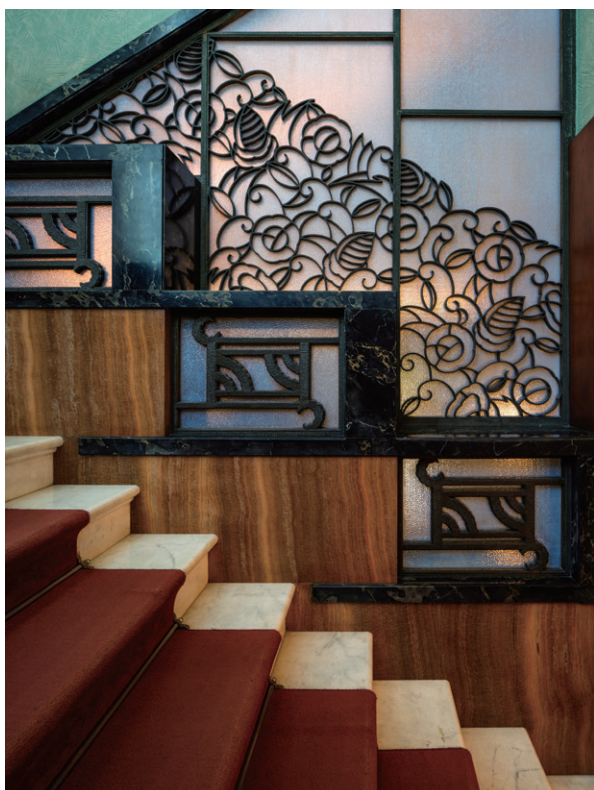


図20 (4-1-c)
トップページと建築空間の対比

さて、ここからは、上記でみてきたようなデザインの結果において、なぜそのような手法にしたのか、という背景について述べたい。「庭園美術館ならではのブランドイメージを拡充する」ということや、「庭園美術館らしさを追求する」ということを、サイトに取り入れる際に、国内外問わず様々な美術館や文化施設のサイトを比較検討したことにより、ポイントとなることが見えてきた。それは、サイト上でその美術館らしさを伝えるときの手法の違いである。「何を打ち出すのか」を見定めて、それを「どのように打ち出すのか」を、効果的にデザインに取り入れていくことが大変重要であるのだ。

以下の表は、概ね美術館サイトにおけるデザインの根底にある事象として、考えられ得ることをまとめたものである。

下記の表でいえば、庭園美術館は3番に近いといえる。当館には、これまで受け継がれてきた美の系譜や、歴史とともに紡がれてきた建物の記憶がある。また、その名前の由来ともなる、緑豊かで広大な庭園の存在は、他の美術館との違いを見出せる特別なものだ。「展覧会と庭園」という両翼をのばしていくことが、目指すべき美術館像であり、それを打ち出していくことが、果たすべき目標とも考えられる。

開館40周年を迎えるにあたり、職員全体で行ったウォークアップワークショップ「あなたの理想の美術館」（2023年1月11日実施）では、とりわけ庭園の活用についての関心や期待が高いという結果がでた。それを紐解くと、癒しの空間であることや、非日常性を感じられる場所であるという認識が、職員間で共通していた。このことから、重要文化財の本館（旧朝香宮邸）及び緑豊かな庭園から想起される上質さ、洗練さ、落ち着き、癒しといった点を、庭園美術館のブランドイメージとして確立させ、この先も定着させていくための重要なポイントとして、サイト内での表現の方法を模索したのだった。

上述のようなブランドイメージを、装飾性を以って表現する際に、たとえば「緑風が香る」「四季を愛でる」「桜風がそよぐ」「緑に囲まれた邸宅の静けさ」「歴史の技巧」「記憶の館」「都会のオアシス」というキーワードを掲げてデザインを進めている。なぜトップページが季節感を感じさせる画像のスライドショーなのか、なぜサイト全体の色の構成をベージュや緑にしたのか、なぜサイトの細部にわたって装飾を施したのか、というひとつひとつの結果が、庭園美術館のブランドイメージを拡充させるための手法として機能させる目的があったといえる。

美術館サイトのデザインについて⁴

	打ち出す事柄 -What-	打ち出す方法 -How-	その理由 -Why-
1	展覧会情報	展覧会のメインビジュアルを全面に表示	・世界巡回展などブロックバスターの展覧会の開催が多いから
2	コレクション	作品や作家のビジュアルをレイアウト表示	・作家美術館などマスターピースが揃い、作品に大きな力があるから
3	空間や建築	スライドショー等でテーマや季節感を表現	・展覧会とプラスアルファの総合的な体験を促したいから
4	美術館そのもの	アクセス情報を表示	・美術館の存在を周知したいから

4 1の例としては、東京都美術館（<https://www.tobikan.jp/>）、2の例としては Van Gogh Museum Amsterdam（<https://www.vangoghmuseum.nl/en>）、3の例としては、島根県立美術館（<https://www.shimane-art-museum.jp/>）、4の例としては、青森県立美術館（<https://www.aomori-museum.jp/>）などが挙げられる。

第2節 機能性について

「ユーザーフレンドリー」という言葉は、ユーザーにとって使いやすく、扱いやすいことを指す。「『ユーザーフレンドリー』であるかどうかの大まかな判断基準は、『この道具は私がしてほしいことをやってくれたか?』である」(クリフ・クアン, ロバート・ファブリカント 2020: 017)¹とされるように、たとえばサイト内の動作が、ユーザーにとって期待通りのものとなっているか否かで、ユーザーフレンドリーかどうかは判定される。さらにいえば、ユーザーにとって優先度の高い情報が、階層を踏まなくても辿り着ける構造になっていること、すなわち、情報の整理と導線の確保が適切に達成されていれば、ユーザーフレンドリーなサイトということがいえる。当館では多種多様なイベントやプログラムを実施しているが、それらの属性、つまり参加できるか、事前申し込み制なのか、定員があるのか、などということをあらかじめグルーピングし、デザインに組み込んでいる(図21)。

サイトを利用する際に、ユーザーにとって何か不具合が生じているとすると、多くの場合、それはデザインの問題

に集束することが多い。その場合のデザインとは、「機能性」に係るものである。たとえば、第3期サイト運用中は、チケットをどこから買えばいいのかわからない、というお問合せが多発していた。これを改善するために第4期サイトでは、誰もがチケットだと判別できるピクトグラムをフッター部分に配置することにした(図22)。

「ユニバーサル・デザイン」²とは、このチケットのピクトグラムのようなものを指す。あらかじめ、デザインによって可能な限り多くの人々が利用しやすい環境を作り出すことで、デザインにおける機能性への応答がなされる。ここで着目したいのが、あらゆる人々を対象にすることとは、一方で、デザインが均一的となってしまう、独自性や創造性の発揮が思うようにできないという問題が生じてしまう。いわば、装飾性の排除による、デザインの制限ともいえる。加えて、このようなユニバーサルなデザインによって、果たして多くの人々は本当に利用しやすくなるのか、という点も指摘される。



図21 (4-2-a)
主なグルーピング



図22 (4-2-b)
フッターのピクトグラム (SP)

- 1 クリフ・クアン / ロバート・ファブリカント (2020) . 『「ユーザーフレンドリー」 全史: 世界と人間を変えてきた「使いやすいモノ」の法則』 . 尼丁千津子訳 . 株式会社双葉社
- 2 1997 年にアメリカ・ノースカロライナ州立大学 (NCSU) のロン・メイス (Ron Mace, 1941-1998) 率いるプロジェクトチームは、「ユニバーサル・デザインに関する7原則」を提唱した。NC State University, Center for Universal Design, College of Design. "The Principles of Universal Design" <https://design.ncsu.edu/wp-content/uploads/2022/11/principles-of-universal-design.pdf> (2024.2.25)

多くのヨーロッパのデザイナーもアメリカと同様、ユニバーサルという言葉在设计に対してあまり使いたがらない。人や味覚、環境が多様であるということを考慮したとき、すべての人に受け入れられるデザインというのは達成不可能であり、望まれもせず、現実的ではないからだ（ジュリア・カセム 2014: 68）。

上述からもわかる通り、ユニバーサル・デザインを取り入れることだけでは、デザインにおける機能性を十分果たすことはできないという側面から、第2章第3節でも触れた通り、「インクルーシブデザイン」という考え方の意義が問われる。プロセスの段階からあらゆるユーザーのニーズを踏まえて、デザインに取り込んでいくことで、本当の意味での「誰も取りこぼさない」機能性を有したデザインに近づいていくことができるのだ。

第3節 装飾性と機能性の共存

アクセシビリティ診断の際に、以下のようなフィードバックがあった。

「装飾の目的であれば適正とみなされるが、何かしらの情報を伝える目的であれば、不適合な項目がみられる」

これは、サイト内には目的別に、大きく分けて2種類の文字フォントを使用していることに関係する。ひとつは、情報伝達手段として、読んでもらうための文字としているもの(図23-1)、もうひとつは、装飾物としてそのページを彩る、飾り文字¹として表示しているものだ(図23-2)。

仮に、読ませるためだけの文字フォントだけでサイト内を構築すると、やはり変化のない単調なサイトとなってしまうが、飾り文字を組み合わせることで、このサイトならではの特徴や独自性が表現されるといえる。前節で述べたように、機能性を重視する際に必ず生じるデザインの均一性は、装飾性を組み合わせることで、創造的なデザインとして変化させることができる。その上で、機能性と装飾性の双方が目的を共にして、デザインに落とし込まれている調和の状態が重要であるといえる。



(上) 図23-1 (下) 図23-2 (4-3-a)

さらに興味深いフィードバックをふたつ挙げたい。サイト内の「バリアフリーについて」(図24)というページでは、アコーディオンメニュー²を採用しているが、このデザインによって、目で見えて利用するユーザーはいち早く取得したい情報を察知でき、参照できる。しかし一方で、PC-

Talkerなどのスクリーンリーダーユーザーにとっては、見出し部分³がまず初めに読み上げられるようになっておらず、そのため本来は自分にとって不要なコンテンツはスキップして、取得したい情報にすぐさま辿り着きたいのに、そうできないという点を指摘された。

もうひとつのフィードバックは、サイト内の「カレンダー」(図25)の動作についてであった。これまで多くのウェブサイトでは、カレンダー内のコンテンツは読み上げられないことが多かったが、このサイトでは読める仕立てになっている点が評価された。目で見えて利用するユーザーにとっても、展覧会情報と休館日は色の違いで識別でき、その他のイベント情報などについては、文字情報から判別できる。このように、スクリーンリーダーユーザーと、目で見えて利用するユーザーの双方において、異なるユーザーエクスペリエンスを達成させている。

このふたつのフィードバックをまとめると、バリアフリーのページについては、よいユーザー体験ができている場合もあれば、わるいユーザー体験となってしまう場合もある。他方、カレンダーのページについては、どのユーザーも概ねよい体験ができているといえる。それは、ひとつのインターフェースで、異なるユーザーエクスペリエンスを生み出すことに成功していることを示す。後者の事例は、機能性と装飾性の調和という面で評価されるものである。

結論として、ユーザーエクスペリエンス、すなわちよいユーザー体験を拡張させるために、装飾性と機能性の共存は必須である。あらゆるユーザーをとりこぼさないためには、この両者の共存を探っていくことが重要なキーとなる。つまり、デザインの内実によって「ユーザーエクスペリエンスの拡張」が可能となり、それは装飾性によって担保されることもあれば、機能性によって担保されることもある。両方のバランスを慎重に検討することが重要なのだ。

1 アール・デコ調のタイポグラフィーを採用している。

2 コンテンツ毎に折りたたみ式のメニューとなっており、対象コンテンツをクリックすると開いて展開するデザインのこと。

3 「障害のあるお客様へ」や「車椅子をご利用の方へ」などを指す。



図24 (4-3-b)

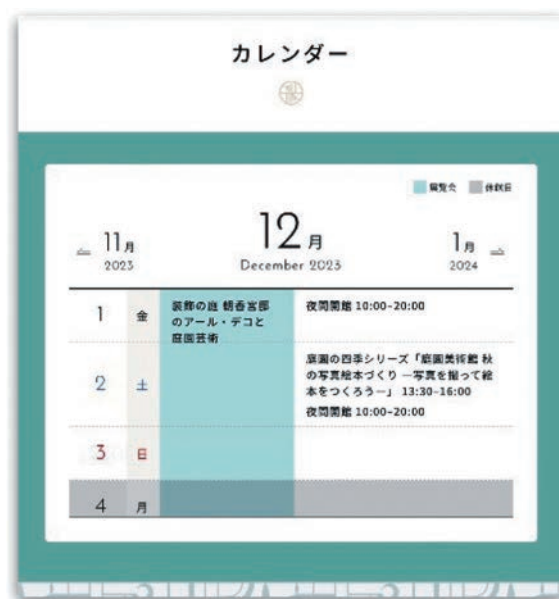


図25 (4-3-c)

おわりに

サイトリニューアルを終えてからの運用フェーズに移った今、「真実の瞬間」に触れる機会が多い¹。実際ユーザーはどのように操作しているのか、本当のところ使いやすいのか、どのような点を改善すべきなのか、その応答の日々だ。

全力で取り組んだにもかかわらず、それまでなぜか隠れていた小さな問題点が目の前にいくつも浮かび上がってくる。あなたはそのプロトタイプを作業場に持ちかえて細かい修正だけでもいくつか入れられるよう、時間が止まってくれればいいのと思うだろう。もちろん、その後すぐに修正の機会は訪れるし、引き続き何度も何度もデザインの改善に取り組まなければならない。デザイナーとユーザーとのこうしたフィードバックサイクルは、まさに「ユーザーフレンドリーな世界」の鼓動である（クリフ・クアン, ロバート・ファブリカント 2020: 446）。

サイトリニューアルに着手する際に、重視する観点として、私たちはふたつの事項を考えた²。繰り返しになるが、ひとつはウェブサイトにおける情報発信ならびに情報公開の即時性を担保することによって、結果として、ウェブアクセシビリティの拡充につながるという見立てと、ユーザーフレンドリーとインクルーシブデザインの考えの下、ウェブサイトにおいて、どのようなデザインを以て作用させるのが望ましいか、求められるか、適切かを検討するということである。

前者は、どちらかと言えば、一般ユーザーに係ることというより、一緒に働く仲間との協同作業に依る。CMSが実装された今、職員ひとりひとりが情報発信への意識を高く持つことで、更新性が保たれ、ウェブサイトアクセシビリティの拡充につながっていくことは共通認識としてある。ただし、サイト内だけの充実だけでは果たせないことも多い。第1章第1節でも触れたが、実地開催との連動

や、その後のアーカイブ情報を掲載することなど、情報の蓄積と展開によって、真の情報アクセシビリティ強化につながるのである。また、施設の設備改修などにより、現に美術館へ足を運べない時、情報の発信や提供の要となるのは、なによりもウェブサイトである。これまでも当館では幾度となく、そういった経験をしてきた。その場合に基盤となるウェブサイトの存在は明実で、現場を補完する役割として、より重視していくことが大切だ。

後者については、ユーザーフレンドリーやユニバーサル・デザイン、インクルーシブデザインの考え方をそのままデザインに取り入れてしまうと、「機能性」ばかり重視される恐れがある。そうではなく、「装飾性」との共存を図ることで、「ユーザーエクスペリエンスの拡張」を可能にしていくということが、第4章によって結論づけられた。

美術館ウェブサイトにおいて、「装飾性」に表されることは、その美術館らしさであったり、その美術館を語るものである。一方で、「機能性」に表されることは、ユーザーフレンドリーであることや、ユニバーサル・デザイン、もしくはインクルーシブデザインを試みていることである。本稿を通して、庭園美術館のリニューアル後のウェブサイトをみたときに、これらの装飾性と機能性は、共存しているということがいえる。ここで着目すべきは、どのように共存・調和させるかを、ユーザーとの対話を通して追求していくことだ。それは、制作の段階から必要なことであり、さらにいえば、ローンチした後も継続させていかなければならない事柄だ。「おしゃれで（誰もが）使いやすいウェブサイトは実現できるのか？」という問いの答えは、実際のところユーザーに託されている。ただし、デザインをする者たちが、そのようなサイトを実現するための一手段として、装飾性と機能性の共存を図るという観点を持ち合わせ、トライアンドエラーの中で実践していくことは、非常に有効なことであり、また大変意義深い。

1 第3章第1節の図17にあるロードマップをみてわかるとおり、2024年1月から継続的に、あらゆるバックグラウンドをもつユーザーの方々による使用テストを行なっている。

2 第2章第3節参照。

【参考文献】

【書籍】

アライド・ブレインズ編(2008).『Webアクセシビリティ JIS規格完全ガイド 改訂版』. 安藤昌也監修. 日経BP社

伊原力也・小林大輔・榎田草一・山本伶(2023).『WEB+DB PRESS plusシリーズ Webアプリケーションアクセシビリティ 今日から始める現場からの改善』. 株式会社技術評論社

クリフ・クアン/ロバート・ファブリカント(2020).『「ユーザーフレンドリー」全史 世界と人間を変えてきた「使いやすいモノ」の法則』. 尼丁千津子訳. 株式会社双葉社

ジュリア・カセム(2014).『「インクルーシブデザイン」という発想: 排除しないプロセスのデザイン』. 平井康之監修. ホートン・秋穂訳. 株式会社フィルムアート社

ingectar-e(2020).『見てわかる、迷わず決まる配色アイデア 3色だけでセンスのいい色』. インプレス

College of Design. “The Principles of Universal Design” <https://design.ncsu.edu/wp-content/uploads/2022/11/principles-of-universal-design.pdf> (2024.2.25)

【ウェブサイト】

アーツカウンシル東京. “東京都歴史文化財団におけるアクセシビリティ向上の取組” https://www.artscouncil-tokyo.jp/uploads/2023/12/4_reference-1_231225.pdf (2024.2.25)

国立国会図書館. “世界のウェブアーカイブ (おすすめコンテンツ)” https://warp.da.ndl.go.jp/contents/recommend/world_wa/index.html (2024.2.25)

総務省. “情報通信白書 令和元年度版” <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/html/nd111110.html> (2024.2.25)

デジタル庁. “ウェブアクセシビリティ導入ガイドブック” <https://www.digital.go.jp/resources/introduction-to-web-accessibility-guidebook> (2024.2.25)

東京都庭園美術館. “公式ウェブサイト” <https://www.teien-art-museum.ne.jp> (2024.2.25)

日本規格協会. “JIS X 8341-3 : 2016” https://webdesk.jsa.or.jp/preview/pre_jis_x_08341_003_000_2016_j_ed10_ch.pdf (2024.2.25)

NC State University, Center for Universal Design,

茶室「光華」における茶会等行事について
－文化財活用の意義－

板谷 敏弘
(東京都庭園美術館 学芸員)

Toshihiro ITAYA
Curator
Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

はじめに

東京都庭園美術館の日本庭園内には、朝香宮邸時代に建てられた茶室「光華」がある。竣工年月日は不明だが、1936年（昭和11）8月に上棟したことは残された棟札から明らかになっている。設計は武者小路千家宗匠の中川砂村（是足庵）¹、施工は「昭和の名工」とも評された大阪の数寄屋大工平田雅哉²である。

竣工年月日不明が象徴的であるとおり、「光華」については建築の経緯や建築に関わる図面や記録、竣工後の朝香宮邸時代の用途等についても極めて資料が乏しく謎が多い。一方、敷地、建物が東京都の所有となり、美術館として開館する直前の1983年（昭和58）7月に改修工事が行われているが、2010年（平成22）に東京都生活文化局が実施した調査「旧朝香宮邸（東京都庭園美術館）庭園等および付属建造物群調査」の報告書によれ

ば、この時の改修工事は「当初部材の再利用など当時の部材、仕様、仕上を尊重し改修として比較的文化財修理に近い改修」であったとしており、その時点での現況調査を主として、文化財としての「光華」の価値を評価している。その調査の成果のうえで、2015年（平成27）には本館等とともに重要文化財に指定され、2016年（平成28）に耐震補強が行われ現在に至っている。

建築や竣工後の用途など、不明な点については引き続き資料の所在調査や現況調査等を継続していずれ明らかにしていきたいが、本稿では美術館の主催事業として実施している茶会等行事の概要について文化財の活用という観点から記述していきたい。その中で、文化財活用の意義について明らかにしていけたらと思う。また、建築や用途等に係る未解明な点についても、現段階では筆者の推論に過ぎない部分も多いが触れていくつもりである。



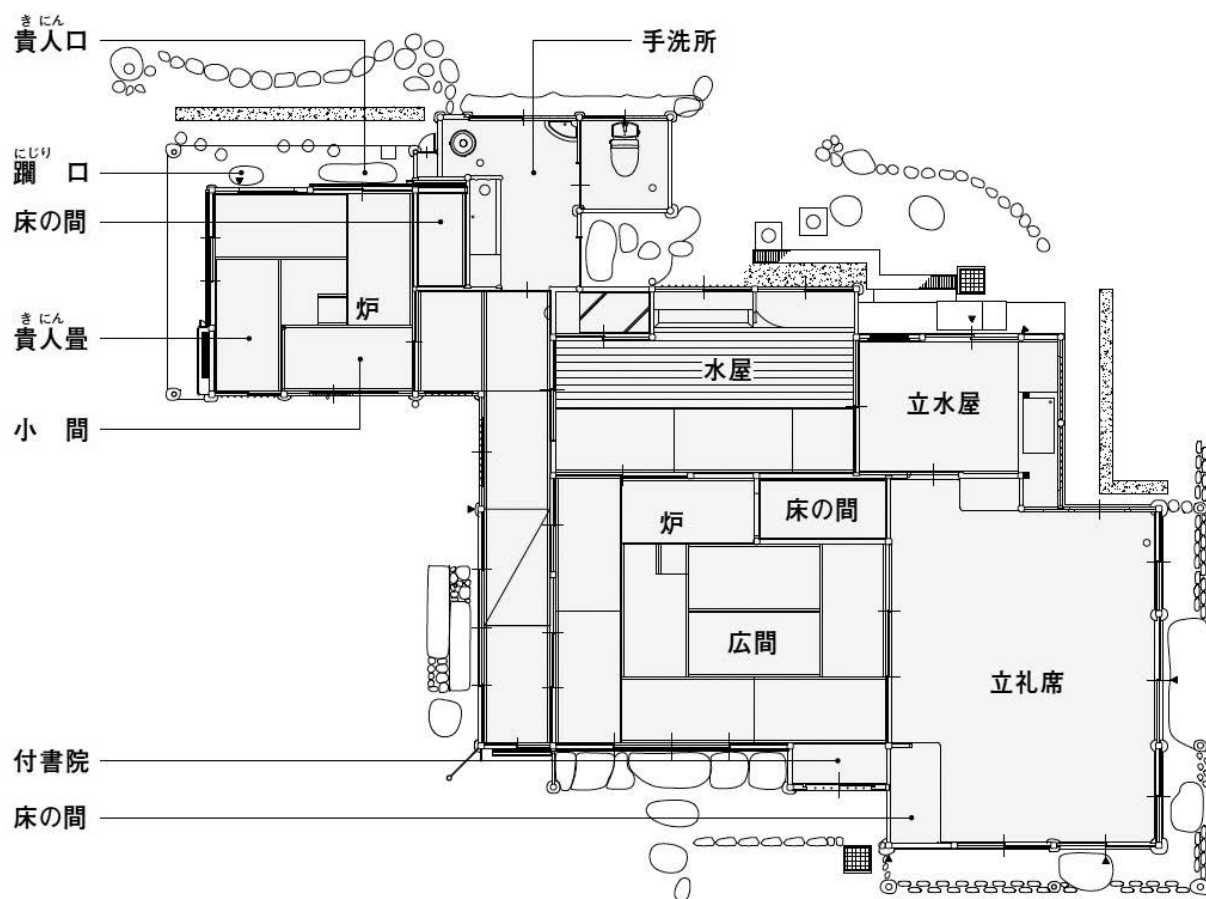
「光華」広間



「光華」小間



「光華」外観



「光華」平面図

1 活用の経緯

1983年（昭和58）の美術館開館以降、「光華」はどのように活用されていたのか。40年の歳月が経った現在、文書として確認できるものはなく、公式写真も残されていないため知ることができない。電子データとして確認できるのは、2005年（平成17）から2007年（平成19）の間、貸出施設として一般の方（法人、個人を問わず）の茶会行事等に利用されていたことである。ただし、利用頻度はそれほど多くはなかった。そして耐震性の問題から2008年（平成20）からは貸出施設の対象から外れ非公開となり、そのまま2011年（平成23）の11月からの美術館全体の大規模改修工事に伴う3年間の休館期間に入る。美術館は2014年（平成26）11月にリニューアルオープンするが、大規模改修に茶室の改修は含まれていなかったため耐震性の問題は解決されておらず、また茶室が含まれる日本庭園の改修工事も未完だったため、リニューアルオープン後も非公開の状態は続いた。

ただし、休館期間中に今後の茶室活用の検討をしていた。非公開となる前に行っていた貸出施設としての利用が考えられたが、前述した2010年（平成22）の東京都生活文化局による調査で、その文化財としての価値が確認されたことと、本館等と共に重要文化財に指定される可能性が高いことから、文化財の保存継承を一義とした活用方法に方向性はシフトされた。2015年（平成27）の重要文化財指定の後、2016年（平成28）の工事では耐震補強を行いつつ、長く未使用、非公開のため劣化や損傷が甚だしく進行した部分については修理が行われた。その修理はすでに指定物件となっている文化財の修理であり、またちょうどこのころ、平田雅哉の系譜を引く大阪の平田建設株式会社で、竣工時と思われる「光華」の写真が発見され、現況が竣工時とほぼ変わらないものであることが確認できた。つまり「光華」の文化財としての価値が再確認されたことになる。

このような状況のなか、工事後の「光華」の活用について再度検討した。その際、茶室を有する都内近県の美術館や庭園等の現地調査、担当者へのヒアリング、有識者の意見聴取等を経て、物件の所有者である東京都の所管部署と協議しながら、以下の方針をたてた。

- ・重要文化財を保護しつつ、全ての来館者が貴重な建築物に親しむことができるよう、庭園公開事業の一環と

して一般公開することを原則とし、貸出しは行わない。

- ・美術館主催の茶会、茶道体験等の事業を行う。

また、本館に準じた維持管理を行うことや、一般公開にあたっては来館者の安全確保のため段差の大きい広間、小間については開放せず立礼席までの立ち入りにすることとした。また、主催茶会や茶道体験を実施するにあたり、裸火（炭火等）を使用する必要があることから、運営者として所轄の消防署に必要な手続きをし、火気の使用許可を得ることができた。

以上のような準備を経た後、2017年（平成29）12月3日に武者小路千家家元後嗣千宗屋氏を亭主に迎え茶室開きを行い、同日に一般公募による参加者を対象とした初めての美術館主催の茶会を実施した。以来、美術館開館日での一般公開と定例的な茶会等行事を継続して今日に至っている。

なお、2021年（令和3）4月に「東京都庭園美術館条例」が施行され、庭園美術館は「公の施設」となり、公益財団法人東京都歴史文化財団が指定管理者として施設の維持管理や美術館事業を行っている。条例や施行規則において茶室は貸出施設となっておらず、その活用については前述の方針を継承している。

2 活用の現況

（1）一般公開・特別公開

文化財としての「光華」の活用において最も重視しているのは、全ての来館者が誰でも均しく文化財建築の内部の実見ができるということである。約90年前に建てられた「光華」は近代数寄屋建築としてはほぼ改変されておらず、およそバリアフリーとは言い難い建物である。ただ幸いなことに「光華」は当時の茶室としては珍しい立礼席を備えている。立礼席は靴を脱ぐ必要がない土間作りであり、東側入口のガラス引き戸の敷居に若干の高さがあるが、容易に跨げる程度であり、車椅子用のスロープの設置も可能である。つまり立礼席までは誰でもがストレス無く立ち入ることができ、「光華」の内部を見学することが出来る。

この一般公開を重視するのには理由がある。前述のとおり、茶室活用検討の段階で、都内近県で茶室を備える美術館等の現地調査と担当者へのヒアリングを行った結果、多くの茶室は貸出しに供されており、一方で通常

は非公開となっていることが確認できた。一般の来場者は、もちろん外観を見ることは出来るが内部には通常立ち入れないのである。それには建物の維持管理や文化財の保護、あるいは貸出し優先として使用料(収入)を確保するという所有者や運営側の理由があるわけだが、そのために茶室という目的が特化された、ある意味特殊な建築物、文化財を実見し、実見することで得られる発見や一種の感動を得る機会が失われているのではないかと感じたからである。

いみじくも当館の本館旧朝香宮邸は、アール・デコ様式を正確に保存継承している貴重な建築物であり、現在は美術館の展示室として一般に公開されている。だがこの本館も宮邸時代はもちろん、その後吉田外相・首相の公邸、外国の賓客を迎える迎賓館、そして所有者であった西武鉄道の迎賓施設という変遷により、一般の人が建物内部に入る機会はほとんどなく、そのため「幻の館」とさえ呼ばれたという。象徴的なエピソードとして、西武鉄道から東京都がこの土地と建物を取得するとき、土地は有償であったが建物、旧朝香宮邸は無償譲渡だった。つまりその時点では、この建物の文化財的な価値は全く認識されていなかったのである。それが1983年(昭和58)の美術館開館以降、多くの方々の目に触れ、また美術館の学芸員や外部の研究者の調査研究の成果が発表されるにつれ、旧朝香宮邸の価値が再認識されることになり、開館からわずか10年後の1993年(平成5)には東京都指定有形文化財[建築物]に指定されている。このように公開され、多くの方に実見され、調査研究の対象になりその価値が再認識されること、そして価値ある文化財として保存継承していく必要性をみなが共有することが最も大切なことであると考えており、それが「光華」の一般公開を

重視する理由である。

なお、「光華」の公開は通常立礼席までとしているが、秋の紅葉シーズンには広間まで立ち入れる特別公開を期間限定で行っている。「光華」は日本庭園をいわゆる借景とするロケーションで立地しており、広間から眺める日本庭園の紅葉の美しさもまた文化財的な価値がある。そして茶室は茶室として活用することでその建築的な特徴や、宮家の茶室としての特異性も発見することができることから、通常の公開のほかに以下に述べるようなさまざまな茶室行事を実施している。

(2) 茶会等行事

「光華」では年間を通じてさまざまな美術館主催事業を行っている。その目的は要約すれば以下のとおりとなる。

- 茶会、茶会体験、建築のトークイベント、親子向け、外国人向けなど、内容や対象をバラエティ豊かにすることで、茶の経験者、上級者だけでなく、より多くの方に参加の機会を提供し、「光華」を実見、体感してもらうこと。
- これらを通じて「光華」の認知度を上げ、また文化財としての価値を認識してもらうことで、保存継承への理解を促進すること。

では、具体的な行事について、その目的やねらいを明らかにしながら紹介する。なお当館での行事の参加者については、公式ウェブサイトによる事前申込制で、定員を超えた場合は抽選、参加費については菓子や抹茶等の実費相当としている。

①「春の呈茶」、「秋の呈茶」

恒例的な行事として「春の呈茶」、「秋の呈茶」を実施している。これは、当館が立地している港区の華道茶道連盟に亭主を務めていただいております、地域連携の意味もある。諸行事のなかではいわゆる「大寄せ茶会」に近いものであり、一席当たりの定員は15～20名程度（コロナ禍中は10名程度）と、「光華」広間（9畳+1畳床の間）の許容人数の最大値に近いものとし、1日の席数は4～6席、一席の時間は40～60分程度である。内容は主菓子、抹茶の提供、道具等の説明で茶席を終えたあと、学芸員による小間（四畳半）の案内を行うこともある。茶

の経験はもちろん問わず、初心者、未経験者でも気軽に参加できるものとしている。つまり、この行事はなるべく多くの方に「光華」での茶会を体験していただくことを一義としたものである。なお、毎回ではないが立礼席も茶席として使用することもある。後述するが、現存する立礼卓は「光華」竣工時からあるもので、1936年（昭和11）に朝香宮家に納められたことが明らかになっている。立礼卓の炬を使ってお点前もでき、参加者も椅子に座って喫茶できる。そして椅子に座ってみると、立礼席の床の間や窓の高さが考え抜かれたものであることにも気が付くのである。



令和4年度「春の呈茶」



令和3年度「秋の呈茶」

②茶会体験「重文わかる茶会」

春・秋の呈茶はなるべく多くの方に「光華」を実見、体感していただくことを目的としているため、建築や茶の湯についての説明や解説は少なからず省いている。しかしながら、「光華」は宮家邸宅の敷地内にあるという特殊性があり、また平田雅哉という名工が手掛けている茶室という建築的な魅力もある。茶室は茶の湯をするために建てられたものなので、その特徴や機能性をより理解するには、ある程度茶の湯の知識が必要となる。そしてその基礎知識のもとに「光華」をじっくりと見ると、宮家の茶室の特殊性も少し見えてくる。茶会体験行事は、一席当たりの定員を8～10名程度（小間に一斉にはいれる人数）、時間を60～70分とし、茶会とは？というレクチャーや蹲^{つくばい}での清め、席入り（^{にじ}躰り口を含む）、お菓子の食べ方、抹茶の飲み方、茶碗の拝見等について、ひとつひとつ説明と実技を交えながら進行していくものである。いわば「茶会を知るた

めの茶会」であり、初心者や未経験者こそ楽しめるものになっている。

「重文わかる茶会」では、茶会における「趣向」に重きを置き、二十四節季に準拠しながらその日の茶会の「趣向」つまりテーマを決め、道具組や主菓子に工夫を凝らしている。参加者はそれらを実見、体験しながら謎解きのように「趣向」の発見に至ることができる。また、点前座と上座の関係、床の間の位置、蹲と席入りの場所、露^ろ地の役割、飛び石のことなど、茶室が茶会を行うための機能性を備えた建築であることと、皇族の茶室であるがために純然たる「侘茶」の席とは若干異なる趣を感じることができるだろう。その理解のために学芸員の解説も補足的にしている。参加者はこの茶会体験を通じて「光華」という茶室の文化財としての価値にも気づくことができる。まさに「重文わかる」茶会である。



令和5年度



令和5年度

③茶会体験「はじめてのお茶会」

「重文わかる茶会」は初心者、未経験者向けの茶会であるが、内容的にはおとな向けといえる。そもそも茶室での「茶会」と聞くと、小学生児童には縁遠い行事と受け取られがちであるが、客としての参加であれば、小学中高学年で十分楽しみ、また作法の意味を理解することができる。そこでまずは小学生にもわかりやすい「茶室「光華」による 初心者とこどものための茶会ガイド」というパンフレット（後述）を作製した。このパンフレットを作製するときに留意したのは、「茶室「光華」の広間での茶会に参加する場合」を想定して記述したことである。子供向けの茶の湯や茶会のガイドはあることはあるが、今現在、特に都内で「床の間」があったり、ましてや「炉」が切られている

住宅に住んでいる子供は極めてまれであろう。「床の間」や「炉」をやさしい言葉やイラスト、写真で解説してもなかなかイメージがわからない。であれば、来館すればいつでも実物を目にすることができる「光華」の広間をそのままモデルにしたほうがわかりやすいだろうと考えたからである。

「はじめてのお茶会」は、このパンフレットに沿って茶会を実体験してみようという行事である。対象は子供（小学3～6年生）と保護者のペア、また茶の初心者（未経験者）とした。この茶会を通じて、参加者は茶会の進行や作法の意味、道具のことなどを学ぶとともに、「光華」が単なる「日本的な木造建築」ではなく、茶の湯を行うための「茶室」であることも同時に理解できるようプログラムを組んでいる。



令和4年度



令和4年度

④「こども茶会」

こちらも子供を対象とした行事である。③と異なるのは、「こども茶会」は参加する子供たちに客としてではなく亭主として客をもてなす、思いやりという茶の湯の基本的な考え方を、実際に自分が亭主役になって実践してみることによって理解を深めるためのものである。③よりはもっと茶の湯に寄った内容であるが、主客を転じた時に茶室という空間がどのような機能を備えているかを体感することができる。

具体的には子供（小学3～6年生）と保護者がペアで参加していただくが、プログラムとしては最初にペアは分離し、はじめの1時間は子供たちだけで講師の茶人による広間での模擬茶会の体験をする。その中で、床の間の掛軸の読み方と意味、その他の道具の名前と用途、お

辞儀の仕方、その日の主菓子の意味、主菓子の食べ方、お茶の飲み方などを習ったうえで、次に主菓子の出し方、茶筌での点茶、茶碗の出し方など亭主役を体験する。そして1時間後に保護者と合流し、それぞれの子供が保護者に床の間の説明、主菓子の説明、道具の説明などをしたあと、茶筌で点茶をし、それを保護者に飲んでいただくという流れになる。もとより、たったの1時間でどれほど覚えられるかと言えば、もちろん完璧であるはずがないが、実は子供たちはおとなが驚くほど出来るようになるものである。合流して子供たちのおもてなしを受けた保護者たちは一様に驚きの表情をしている。茶室と茶の湯というコンテンツを利用した「子供と保護者のためのプログラム」として、今後も実施していく予定である。



令和4年度



令和4年度

⑤「夏の特別茶会」、「冬の特別茶会」

先に記したとおり、「光華」は1936年（昭和11）に上棟、その後竣工したのち、ほとんど改変されることなく2015年（平成27）に重要文化財に指定されている。その段階でエアコンは設置されていなかったもので、現在でもエアコンはない。したがって茶室内の夏の暑さ、冬の寒さはたいへん厳しいものがあり、そのため茶室行事については気候の穏やかな春と秋に実施することがほとんどである。しかし当然ながら茶の湯は季節を限って行なわれるものではなく、エアコンがなかった時代から春夏秋冬、季節に応じて趣向を凝らして行われてきた。そして夏は涼しさを、冬は暖かさを感じられるよう、建築そのものにも工夫がなされている。エアコンのない「光華」であるからこそ、数寄屋建築の特徴に気づくことができるのである。

夏の特別茶会では「涼感」を趣向とし、道具のほとんどはガラス製のものをを用いている。きっかけは2020年（令和2）10月～2021年（令和3）1月に実施した企画展「生命の庭－8人の現代作家が見つけた小宇宙」の出品作家であった青木美歌氏にガラス製の棗、水指、花入れの製作をお願いしたことからである。アーティストである青木氏に、使用することを前提とした「道具」の製作を依頼することに若干のためらいはあったが、美術館の茶室で現代作家の作品を使用することに意義を感じお願いしたところ、ご快諾いただいた。完成した作品は青木氏らしい造形で透明感に溢れ、しかも道具の用途を満たす素晴らしいものであり、以来夏の特別茶会で使用している。茶碗、茶杓は市販のガラス製、建水は市販のサラダボウルを見立てとして用い、またルネ・ラリックのアンティークのボウルを茶碗に見立てて使用している。茶会は広間で行うが、「光華」の広間は東、西、南面がガラス戸または障子で開放可能なことから、出来るだけ開放した状態としている。南面の軒下にはすだれを掛け、ガラスの風鈴も多数掛けている。菓子は錦玉を主とした透明感のある特注品、抹茶は冷茶としている。まさに五感で涼を感じる仕掛けで、アンケートでは「風が通るのでずしく、おいしいお茶もいただけて、よい時間をすごさせていただきました。日本建築の良さもたのませていただきました」という感想も寄せられている。

冬の特別茶会は、時期的には12月に行くことが多く、散っていく木々の葉の儚さと、一方で何事も受け入れて動じない心を、「無事」という禅語に託した趣向としている。2021年に制作した「光華」のプロモーションビデオ（後

述）を観たあと、広間で主菓子、そして「無事」という言葉と本日の趣向を解説したのち、小間で薄茶を一服していただき、最後に炉の炭火を拝見して終了という流れである。道具は白で揃えている。これは、光の三原色を合わせると白になる、つまりすべてを受け入れた色であり、そのうえで無垢で穢れのない心を象徴させている。広間から見る日本庭園の借景の素晴らしさはもちろん計算された設計であり、小間の下地窓や連子窓から入る陽が、炉や床の間に格子の影を写し出すのも計算のうえである。また炉という茶室ならではの設えに炭火の灯り、そして四畳半というサイズなら十分な温もり、このような茶室建築の特徴、素晴らしさを体感できるのはこの茶会ならではの。アンケートでは「今後も茶会を続けて下さい。重要文化財も活用しないと宝の持ち腐れになってしまうと思うので。文化財の必要性をより感じられると思います」という言葉も聞かれた。



令和4年度夏の特別茶会「ガラスの清寂」



令和5年度冬の特別茶会「光と影の清寂」

⑥ 「トークイベント」

茶会等の行事は、茶の湯を行うための茶室の機能性を理解するのに役立つものであるが、一方で数寄屋建築の特徴や、「光華」そのものの建築的な特徴をより明らかにするために実施しているのがトークイベントで、年度に1回行っている。

初年度（令和2年度）は、京都の中村外二工務店代表で数寄屋大工棟梁の中村義明氏³を講師にお招きし、「光華」の立礼席、広間、小間を巡りながら数寄屋建築とは何か、数寄屋建築の見方ということ、国宝の待庵など数々の茶室の例も出しつつ解説していただき、その上で「光華」の特徴についてお話しいただいた。

2年目は建築史家の小沢朝江氏（東海大学建築都市学部建築学科教授）と水澤工務店⁴の建築部長（当時）の川嶋健史氏、大工棟梁（当時）の久保田豊氏にお越しいただき、小沢教授が書院造と数寄屋造の比較対照のレクチャーをしたあと、川嶋氏と久保田氏とともに「光華」の外観や各部屋を巡りながら建築的な特徴についてそれぞれ意見や感想を述べた。水澤工務店は東京の、関東の数寄屋建築を手掛けているが、「光華」は基本的には京都、関西の数寄屋建築であり、その違いについてのお話が興味深かった。また川嶋氏からは、「光華」の上棟が1936年（昭和11）の8月ならば、この規模であれば同年の12月には竣工していてもおかしくない、という見解が示された。これは本稿の冒頭に述べた「光華」の竣工時期の考察にあたり、非常に参考になる重要な見解だといえる⁵。

3年目は同じく小沢教授と、小田原のせりざわたけし工

務店、大工棟梁の芹澤毅氏に講師をお願いした。芹澤氏は京都の数寄屋大工安井清氏の教えを受け、現在は文化財建造物木工技能者であり、小田原城の「平成の大改修」にも携わった大工棟梁である。内容的には前年を踏襲したが、芹澤氏からはより大工の技法に注目したお話があり、それにより「光華」の建材の質の良さや施工技術の高さを再確認することができた。それは、素人にはなかなか一見しただけではわからない話が多く、「光華」の文化財としての価値、貴重さを参加者とともに共有することができるものだった。

4年目の令和5年度も、小沢教授と芹澤氏に講師をお願いしたが、芹澤氏には無理を言って、実技も行っていた。具体的には平鉋掛けと檜鉋掛け、そして光付けの技法についてである。鉋掛けでは、現在でも機械加工では及ばない職人の手の感覚の精緻さを実演していただき、丸材を交叉させる光付けの技術の難しさも実物によって示された。例えば丸太と丸竹を交叉させている「光華」立礼席の天井の仕上げだけでも「一か月はかかるかもしれない」という話があり、これも「光華」がいかに丁寧に、いかに高い技術で建てられたかを示すものである。また小沢教授からは、とくに小間の特異さ、つまり窓が多く明るいこと、天井が高いこと、点前座の光の入りにみる演出効果など、皇族の茶室であることを意識した造りになっていることなどの説明があり、「光華」の特異性、希少性が注目された。いずれも建築上の文化財的価値を再認識させるものであり、参加者に強い印象を与えただけでなく、「光華」の調査研究に大いに寄与する内容となっている。



令和3年度



令和5年度

⑦その他

①～⑥は毎年度定例的に実施している行事であるが、これ以外に単発的に実施した事業がある。その目的は同じく茶室という文化財の活用と、幅広い興味を持った方々への情報発信である。簡単に紹介する。

㊦「作陶と茶席—大切な人のために茶碗を作り、茶を点てる—」

コロナ禍直前の2019年（令和元）10月・11月に実施した。言うまでもなく、茶碗は茶の湯にとって最も大切な道具である。当時、インバウンドが急激に増加する中、いわゆる「爆買い」ではなく日本文化の「体験」が注目されており、作陶の体験ができる陶芸教室も盛りであったと記憶している。それはインバウンドだけでなく、日本人、それも老若男女に受け入れられやすい「体験」であったので、作陶と茶席をセットにした企画とした。

子供と保護者、あるいは友人同士などペアでの参加とし、タイトルのとおりお互いに相手のための茶碗を作り、出来上がった茶碗で相手のために茶を点てるという内容である。作陶の講師には近隣（港区白金）で陶芸教室を行っていた陶芸家の角田啓男氏らに依頼した。茶室内で作陶はできないため、こちらは新館のトラックヤードで行い、角田氏に教室に持ち帰っていただき、そこで焼成してもらった。約1か月後に焼成した茶碗をそれぞれの参加者に返し、茶室広間で相手のために作った茶碗で相手のために茶を点ててもらった。点茶の指導は「重文わかる茶会」で毎回亭主をお願いしている沼尻宗真氏、海老澤宗香氏をお願いした。茶の湯の最も基本となる「相手への思いやり」をテーマにした事業であるが、陶芸に関心のある方、またペア参加の楽しさなどに訴求し、最後に茶席の場となる「光華」に誘うことを狙いとした。



平成31年度



平成31年度

④ 光華茶会スペシャル「書と茶の湯のひととき」

活用の経緯で述べたとおり、耐震補強後の茶室開きを武者小路千家家元後嗣千宗屋氏に務めていただいていた以来、武者小路千家とは定例的に「光華茶会」を実施してきたが、新型コロナウイルスの感染状況とのタイミングが悪く、2019年12月の第5回「光華茶会」を最後に長く中断することとなった。しかし、今年2023年（令和5）5月に武者小路千家教授の傳田妙京氏を亭主に迎え、3年半ぶりに「光華茶会」を再開することができた。この間、上記①～⑥のとおり当館の茶室行事もバラエティが増したことから、「光華茶会」もまたこれらとは別の関心層をターゲットとし、「光華」活用と参加者の裾野を広げるための企画を考えた。その中で傳田氏の旧知の仲である書家の根本知氏をご紹介いただき、光華茶会スペシャルとして「書と茶の湯のひととき」を実施することとした。根本氏は2024年（令和6）NHK大河ドラマ「光る君へ」の題字揮毫をされた方という話題性もあったが、最近の茶道研究のなかで、「侘茶」の精神性の根幹に和歌（連歌）の「冷え枯れ」の風情が注目されていて⁶、「書」とくに「仮名」は歌を書き留める記号であり音符のようなものという根本氏の言葉に共感したことが大きい。

立礼席で根本氏の書に関する簡単なレクチャーののち、参加者は「仮名」書きの実技を根本氏の指導のもと行い、最後に色紙に清書した。その後の広間での茶席は傳田氏が亭主となり、床の間には根本氏の書作品の掛軸を掛け、また歌に結び付けて珠光スタイルの多彩な茶碗で呈茶をした。小間の説明は美術館担当が行ったが、床の間には根本氏書の源信明の歌の短冊を掛け、「冷え枯れ」と「侘茶」について、最近の研究動向を話した。参加者には書道の経験者もあり、また根本氏目当ての方もい

て、新しい関心層に「光華」のアピールができた。



令和5年度



令和5年度

3 新たな取り組み—光華倶楽部—

(1) 実施の背景

これまで2で記したとおり、重要文化財の「光華」を多くの方に知っていただき、その文化財的価値を認知してもらうために、さまざまな関心層に向けて行事を行っている。だが、応募者、参加者のなかで10代（中学生・高校生）の割合は極めて少ない。令和2年度の文化庁の調査報告書⁷によると、国内の茶道人口は減少傾向にあり、また茶道に携わる年齢層は高齢化が進んでいることがはっきりしている。一方で平成29年度改訂の小・中学校の学習指導要領に「我が国の伝統と文化の尊重」について学習内容に含めることが記載されていることが背景にあっ

て、新しい関心層に「光華」のアピールができた。いと記述されている。報告書には年別の推移が書かれていないので増減傾向は把握できないが、10代の茶道への関心は決して低いとは言い切れない。当館の茶室行事に10代の応募、参加が少ない最大の理由は、情報が対象者に届いていないということに尽きると思われるが、これを一気に打開することは難しい。そこで発想を転換して、美術館の茶室行事の「参加者」になってもらうのではなく、「実施者」になってもらうことはできないかと考えた。つまり美術館主催の茶会において、学校茶道部が「亭主」となり、茶会参加者に呈茶等を行うということである。

きっかけは財団全体で取り組んでいる「Welcome Youth」である。これは18歳以下の方が気軽に芸術文化に親しんでいただく機会を提供する目的で都立美術館・博物館の観覧料を免除する事業である。平成31年度の「Welcome Youth」に際し、当館では観覧料の免除以外に、若者たちがむしろ主体的に美術館の事業に関わる機会を創出できないかと考え、「光華」での高校茶道部による茶会を計画した。趣旨に賛同してくれる高校茶道部も決まり、2020年（令和2）3月に実施する予定であったが、折しも新型コロナウイルス感染拡大が著しい時期と重なってしまい、止む無く中止せざるを得なくなった。

その後も新型コロナウイルス感染拡大に伴い、学校の部活動もさまざまな制限を受けたことは周知のとおりである。一方で美術館側ではこの事業のブラッシュアップを考えていた。当館は港区に立地しているが、港区の特徴のひとつとして各国の大使館が非常に多いことが挙げられる。把握しているだけでも100弱あり、その数は突出している。この立地を何かに活かせないかと考えていた。それは当館の公式ウェブサイトにある美術館の「今後の方向性」のなかに、「2. ダイバーシティへの取組の推進」があり、「近隣の公共機関・文化施設と連携した在住外国人などに向けた交流事業を充実していくことで、多文化共生社会づくりへの貢献を果たしていきます。」と表明しているとおりである。大使館との連携はこれに該当するが、具体的にどのような連携をすればよいかを模索していた。そこで考えたのが高校茶道部と大使館をマッチングし、茶道部が大使館の方々を招いて「光華」で茶会を催し、その返礼として大使館が茶道部員の訪問を受け入れるという建付けである。その目的としては、「光華」の更なる有効活用、高校茶道部を通じて若年層に「光華」の文化財的価値を伝えていくこと、高校生と各国大使館との国際

交流の一助となり「多文化共生社会づくりへの貢献を果たす」ことである。これを事業化するにあたり、事業名を「光華倶楽部」とした。「倶楽部」としたのは、高校茶道部には部活動(クラブ)の延長として気楽に、積極的に参加してほしいという意味を込めている。

(2) 試行

「光華倶楽部」における茶会については、これまでの茶室行事のノウハウと経験からある程度のイメージはあったが、この事業全体の運営についてはいくつも課題があった。まず高校茶道部とのパイプも交流もなかったもので、どのように参加の声かけをするかという前段階でのハードルがあったが、最も危惧したのは、現在の高校茶道部の活動実態(部員の状況、活動の頻度等)がわからず、高校生たちの茶の湯のレベルがわからなかったことである。つまり事前にイメージしている茶会が出来るものなのかどうかの見極めができないということになる。そして更に大きな課題は、大使館とのパイプがないので、参加してくれる大使館が有るか無いかさえ探りようがなかったことである。

そこで、まずは一度でも試行してみることにした。高校茶道部については、港区内の茶道部のある高校(中高一貫を含む)に、「光華倶楽部」の趣旨説明と参加意向を確認するためのアンケートを郵送した。その中で明確に参加意向の回答があったのが慶應義塾女子高等学校(以下、慶應女子高)茶道部だったので、高校は同校を候補とした。大使館候補については港区の一般財団法人港区国際交流協会に協力を依頼した。同協会については、茶室行事とは別に、「ダイバーシティへの取組の推進」の一環として実施している「やさしい日本語プログラム」の開催にあたり協力、協同していただいた実績があった。また、同協会は港区内の大使館との交流があり、港区民を対象に協会主催の「大使館訪問」もすでに複数回行っていた。今回の協力を依頼した頃、ちょうど協会主催の「ルーマニア大使館訪問」があったので、筆者も同席させていただいた。そこで一例ではあるが、大使館訪問のイメージを持つことができた。「光華倶楽部」の打診候補としては、いくつかの大使館の名前も伺っていたが、今回は試行でもあったので、この機会にルーマニア大使館一本に絞って参加を打診した。参加意向、日程、参加人数等いくつか調整を要し時間がかかったが、2022年(令和4)11月13日に慶應女子高との茶会を行うことが

決まった。また、大使館訪問は11月16日となった。日程等が確定したのが実施の2週間前ほどだったが、慶應女子高には日程確定前から諸準備をしていただいていたおり、なんとか間に合った。

茶会当日は、朝から担当となった慶應女子高2年生部員とともに準備をし、リハーサルも行って動きやタイムスケジュールを確認、修正していった。14時にルーマニア大使館の方々が茶室に集合し、立礼席での挨拶、露地を通して広間蹲で清め、広間に席入り、お菓子の提供、呈茶という進行だった。お点前や半東による説明、蹲でのデモ、お菓子や茶の運び等はすべて生徒たちが行った。なお、言語は英語である。呈茶終了後に、大使館の方々に点茶体験をしていただいた。2人に1人の割合で生徒が付き、点茶のレクチャーを行った。呈茶まではお点前を見たり、半東の説明に耳を傾けるなど、あまり会話の余地はなかったが、点茶体験になるとお互いに顔を突き合わせ、会話が生まれ、とても親密な空間となりコミュニケーションが活発になった。ところどころ笑いが起きるなど和やかな雰囲気となり、時間が過ぎるのが惜しまれる感じであったが、開始から60分を過ぎたあたりで終了とした。

大使館訪問は平日であったため、午後4時からの訪問となった。ルーマニア大使館内は比較的広いロビーがあるので、茶会担当の2年生だけでなく1年生・3年生も参加した。日本の大学に留学しているルーマニア大使館研修生が日本語でルーマニアの地理、歴史、生活、文化、観光地等についてパワポで説明、その後質疑応答を行った。およそ1時間の訪問であった。

双方に事後アンケートを行ったが、大使館、高校ともたいへん満足で有意義であったとの回答を得た。大使館の方々は、茶会というセレモニーそのものの珍しさ、面白さが新鮮であり、また日本の若者と交流できたことが楽しかったようである。高校生たちには緊張感があるなか、自分たちで考えた説明やおもてなしができ、外国の方と交流できたことに達成感を感じたとのことだった。全体でみても時間、内容、難易度、コミュニケーション等のバランスが良く、「光華倶楽部」茶会のひとつの定型となり得る感触があったので、試行として成果があった。ただ、今回は港区国際交流協会の協力に参加する大使館が決まったが、それでも調整に時間を要するなど、大使館との連携事業の難しさを実感することとなった。



ルーマニア大使館&慶應義塾女子高 茶会



ルーマニア大使館訪問

(3) 本格実施

試行により「光華倶楽部」の事業運営の目途や課題が見えてきたので、令和5年度からの本格実施に向けて、試行の直後から準備に入った。まずは高校と大使館それぞれに参加の意向調査をすることとし、大使館については港区内とし、高校については23区内に範囲を広げ一斉にアンケート調査を行なった。なお、この意向調査から日程を含めたマッチングまでは外部の業者に業務委託した。年間の目標は4組とした。その結果、参加意向の高校は25校に達し、一方で大使館は電話での問い合わせを含め6か国に留まった。高校が多かったのは、アンケートと一緒に送った光華倶楽部のご案内に、試行の事例を写真入りで紹介したことで、高校茶道部の活動として興味を持てただけことが理由であろう。一方で大使館は、やはりパイプのないところにアンケート等を送っても、

本件の窓口となる部署に情報が届かないのではないかと推察する。茶会、大使館訪問それぞれの実施可能な日程、時間、人数等の再確認をしながら、結局可能な大使館は4か国に絞られた。その日程に合致する高校をピックアップし、部員数、活動状況を勘案しながら同条件の場合は抽選とし、4校を決定した。

①ギリシャ大使館&岩倉高等学校

- 大使館訪問 2023年(令和5)11月3日(金・祝)
10:30～11:50 参加生徒6名
- 茶会 2023年(令和5)11月23日(木・祝)13:00～14:10 大使館7名

「光華倶楽部」では、高校茶道部による茶会の返礼の意味で大使館訪問受け入れをお願いしているが、今回はギリシャ大使館の日程都合により大使館訪問が先となった。大使館の物理的なスペース等から受け入れ可能人

数が決まってくるが、ギリシャ大使館はスペースの関係で8名程度とのことだったので、茶会に参加する生徒が主となったの訪問となった。大使館では大使次席のご挨拶のあと、日本人スタッフによるギリシャの歴史、文化、生活、観光等に関するプレゼンがあった。説明のあとの質疑では生徒たちが非常に活発な質問をし、スタッフの方がとても丁寧に答えてくださったため、予定時間を超過した。最後に大使次席のご挨拶があり、生徒たちには訪問の記念品が渡され、最後に記念撮影をして終了した。

茶会は内容、進行とも前年度の試行に習った。迎える生徒は2年生6名で、言語は英語で進行した。大使館は大使ご夫妻、次席ら7名が参加した。学校紹介、茶道のこと、道具のことなどを半東が英語で説明するとともに、

同内容を記した手書きのパンフレットが参加者に配られた。試行時と同じように、お菓子、呈茶までは静かに進行したが、点茶体験ではとても和やかな雰囲気となり、また大使館の方々が非常にフレンドリーに話しかけてくれたことで、生徒たちも積極的にコミュニケーションをとることができた。終わりに大使からの御礼の言葉があり、記念撮影をして終了した。

アンケートでは、大使館の方々は茶会の雰囲気と庭園を含めた茶室のロケーションのすばらしさへの賞賛があったほか、とくに生徒たちの熱意、誠意に心を動かされたようであった。生徒たちはこの日までの準備を含め、無事に終えた達成感と貴重な国際交流体験ができたことへの感謝の言葉が綴られていた。



ギリシャ大使館&岩倉高校 茶会



ギリシャ大使館訪問

②ドイツ連邦共和国大使館&慶應義塾女子高等学校

- ・茶会 2023年（令和5）11月26日（日）14：00～15：10 大使館11名
- ・大使館訪問 2024年（令和6）3月12日（火）16：30～17:30 参加生徒18名

前年度の試行に続いて慶應女子高の参加となったが、2年生が担当するため前年度とは違う生徒たちによる茶会となった。内容、進行は試行時と同じである。なお「光華倶楽部」における茶会で使用する道具は、美術館所有のものはすべて使用可であり、また担当する学校からの持ち込みも可としている。茶会の趣向のなかで相手国への敬意が込められるが、それを体現する道具組も各校と美術館で話し合いながら決めている。そのため美術館所有の道具だけではカバーしきれないところは、各学校の持ち込みとなる。今回の茶会では、ドイツ国旗（3色旗）を連想させる黒、赤、黄（金）のうちの黄にあたる茶碗、マイセン窯の水指、音符を象った蓋置等は高校側からの持ち込みとなった。主菓子は神楽坂の梅花亭製で、ドイツの国花である矢車菊を針切り技法で製作していただいたもので、和菓子職人の高い技術が際立ったものである。やはり点茶体験の場面になるとコミュニケーションが活発となり、双方に笑顔が溢れ、素晴らしい時間を共有できた。出席された主席公使から御礼の言葉があり、記念撮影をして終了したが、大使館の方々が退室するタイミングで、茶道部生徒のヴァイオリン演奏があった。曲はドイツ国家で、見事な演奏に拍手喝采のうちに散会した。

大使館訪問は当初2024年2月5日の予定であったが、首都圏では珍しく大雪となり、交通機関に支障が出る恐れがあったため、3月12日に延期して実施した。当日は季節外れの大雨であった。ドイツ大使館内にある日本庭園をご案内いただく予定であったが、大雨のため散策はできず、大使館内の会議室で初めに主席公使からご挨拶と記念撮影があり、そのあとドイツ外交官と日本人スタッフによるレクチャーがあった。生徒たちからも積極的な質問があり、一つ一つ丁寧にお答えいただいた。ドイツ大使館のシェフが焼いたというプレッツェルが振舞われ、また帰りには冊子やグッズ等のお土産をいただいた。主席公使のご挨拶では、茶会にたいへん感銘を受けたとのことで、その時の生徒たちのおもてなしに応えるかのように、大使館も温かく生徒たちを迎え入れてくれ、心の交流ができたのではないと思う。



ドイツ連邦共和国大使館訪問



ドイツ連邦共和国大使館&慶應義塾女子高 茶会

③モロッコ王国大使館&城西大学附属城西中学校・高等学校

- ・大使館訪問 2024年(令和6)2月24日(土)

2023年10月ころ両者のマッチングが成り、2024年2月11日に茶会を行う予定であったが2月1日にモロッコ王国大使館からキャンセルの連絡があった。直接はマッチング業務を委託している外部業者に連絡があったが、理由については「参加者が集まらない」とのことであった。委託業者とも協議したが、少なくとも年度内でのリスケジュールの可能性は極めて低いことから、止む無く茶会は中止することとした。

一方大使館訪問は受け入れ可とのことで、予定通り2月24日に生徒、顧問、美術館の担当者で大使館を訪れた。大使館は独立した建物だがそれほど大きくはなく、ミーティングルームのような場所で大使館の文化参事官より、モロッコに関するプレゼンがあった。パワーポイントによるプレゼン資料は日本語の文字があったが、参事官からの説明はすべて英語だった。また生徒たちにはキーホルダーやパンフレットが渡されたほか、モロッコのお茶が提供された。生徒から若干の質問があり、最後に記念撮影をして終了した。

④イラン・イスラム共和国大使館&杉並学院高等学校

- ・茶会 2024年(令和6)2月12日(月・祝) 14:00～15:30
- ・大使館訪問 2024年(令和6)2月14日(水) 18:00～19:00

杉並学院高校茶道部は部員数が多く活発に活動をしている。茶会は6名の部員が担当した。内容、進行は他の茶会と同様であり、言語は英語を使用した。日頃から「明るく楽しく」をモットーに活動していることもあり、緊張しながらも笑顔の絶えないおもてなしを心がけていた。大使館の参加者は9名で、そのうち5名が女性ということもあったのかもしれないが、最初からとてもフレンドリーで日本の茶に興味を示してくれた。主菓子はイランの国花である薔薇と、日本の季節感を表す梅の2種類を用意した。とくに薔薇については、相手への敬意を示すという茶の湯の心が伝わったように感じられ、とても喜ばれた。点茶体験で場は和んだが、今回は生徒たちのアイデアで点茶体験終了後に日本の「福笑い」というアトラクションが取り入れられ、大使館の方々も一緒に興じていただき、一層和やかで笑顔の絶えない茶席となった。最後に全員で記念撮影をして茶会は終了した。

大使館訪問は、はじめに大使館内で公使や文化センター長代理のご挨拶があり、日本人顧問によるイランに関するプレゼンがあった。そのあと大使公邸に招かれ、そこでイランの茶やお菓子のおもてなしを受けた。後半には大使も参加され、イランの伝統楽器について説明していただき、生徒たちにとってもフレンドリーに接して下さった。名残の尽きない雰囲気であったが、予定時間を大幅に超過していたので最後に記念撮影をして終了した。生徒たちには記念品も渡され、たいへん充実した、そして親密な訪問となり、茶会を含めて有意義な国際交流の機会となった。



モロッコ王国大使館訪問



イラン・イスラム共和国大使館&杉並学院高校 茶会



イラン・イスラム共和国大使館訪問

(4) 課題と展望

試行を経て本格実施となり、まだ1年しか実績はないが、すでにそれぞれの進行においていくつもの課題が挙げられる。ここでは3点に絞って記しておきたい。

①大使館へのコンタクト

前述したが、令和5年度の実施にあたり港区内の大使館100弱に意向調査を送ったところ、問い合わせを含めレスポンスがあったのは6か国に過ぎない。これほど少なかった理由は明らかではないが、推測するに大使館内の適切な部署にその情報が届いていないことが考えられる。それぞれの大使館の内部事情はもちろんわからないが、大使館に寄せられる膨大な量の情報や問い合わせのなかで、日本の美術館からのこのような意向調査については、なかなか対応できないのではないかと推測される。もちろん適切な部署の目に触れても、そもそも関心がないということも十分考えられる。今回は郵送による一斉調査であったが、今後はなんらか対象を絞って丁寧なコンタクトをする必要がある。また、大使館同士の横の情報交換は比較的活発という話も聞いているので、参加した大使館を足掛かりに情報が広がっていくことにも期待したい。

②日程の確保

大使館、高校の意向が確認できマッチングができたとしても、茶会と大使館訪問の日程調整はたやすすくない。まず高校側では、茶道部の活動は課外活動なので、茶会や大使館訪問参加の余地は、土曜日を含めた平日の授業終了後つまり放課後か、日曜日、祝日に限られる。放課後は当然時間が遅くなり、茶会の準備に必要な時間も

取れない。また学校の所在地にもよるが、大使館訪問も通常の大使館開室時間に間に合わない。日曜日、祝日であっても各種学校行事や定期試験前など、部活動ができないことも多い。大使館側も、とくに茶会参加については公式行事ではなく一種の余暇なので平日対応は難しく、日曜日は当然各自予定があるので、まとまった人数（茶会の目安は10名程度）を集めるのが難しいようである。結果的には茶会は日曜日か祝日、大使館訪問は祝日か平日の夕方というケースになっているが、1年を通して実施可能な日はそれほど多くないのが現状である。

また、今年度はモロッコ王国大使館が直前で茶会をキャンセルという事態もあった。大使館内部の事情や状況は知る由もないが、準備を進めてきた学校側には精神的にも負担をかけることになってしまった。このようなことは例外的と思いたい、この事業の目的や意義について、各大使館にもっと理解してもらえるよう努力しなければならないだろう。

③美術館側の実施体制

① ②にも関連するが、この事業には大使館、高校との各種調整や茶会の準備にかなり多くの時間と労力を要する。当面、年間の目標は4組、茶会と大使館訪問を合わせると、当日対応（土日祝日含む）だけで8日間を費やすことになる。仮に大使館の参加意向が増えれば、さらに実施回数が増えることになる。もちろん「光華倶楽部」の趣旨や目的に照らせば、回数が増えること自体は望ましいことではあるが、先に記したとおり茶室行事は定例、単発的なものを含めてほかに多数ある。そのどれもが目的やター

ゲットを定めたものであり、欠かすことはできない。現状、茶室行事に携わる主担当職員は1名だけであり、それも茶室行事専管ではなく、他の教育普及事業や広報事業も担当していることから、事業の継続性が危惧される。人員不足は当館に限ったことではなくどこでも課題であるが、今年度も行った一部業務の外部委託を効率的に導入していくことを考えなければならない。

「光華倶楽部」はまだ実績は浅いが、担当者として感じたことはある。

まず、高校生たちの適応力である。現在の高校生たちは、いわゆるコロナ禍に中学、高校時代を過ごし、あらゆる行事や部活動も制限されていた。茶道部も対外的な活動はほとんどできず、自校の稽古場でない「光華」で茶会を行うこと、そして外国の方々と相手に英語対応することは初めての経験であり、戸惑いも緊張もあることは想像に難くない。また当日まで「光華」で稽古することはできず、本番の日の午前中に準備とリハーサルを行う。リハーサルの段階ではかなりぎこちないが、いざ本番では修正をして立派に亭主を勤めていた。口々に「緊張した」と語っていたが、その柔軟性と適応力は驚くばかりである。

一方、大使館との連絡調整の難しさは前述したとおりであるが、各国の文化、習慣、考え方の違いはあって当然である。そのような中で、茶会と大使館訪問を通じてお互い共感し、理解しあえることもたくさんある。違うことと共感すること、そのどちらも知ることが多文化共生の第一歩なのだろう。調整や段取りの難しさから交流を避けるのではなく、難しいからこそ学べるものがたくさんあり、交流する意味があると改めて思った。

4 「光華」の広報、PR

文化財の理解促進と保存継承、そのための活用について述べてきた。上述した活用事例そのものが「光華」最大の広報、PRだと考えているが、その他コンテンツでも広報等を行っているので簡単に紹介する。

①茶室「光華」 紹介動画 (Youtube 公式アカウント)

<https://www.youtube.com/watch?v=SfO6imOKdic>

日本庭園内に建つ「光華」は四季折々の風情があるが、最も美しいのは12月上旬の初冬の時季であると筆者は思っている。この頃、紅葉は終わりを迎え、木々の葉が散りゆき、陽は低くその光は長くなって「光華」の奥深くまでを一瞬照らし、すぐに暗くなる。この風情を感じてもらいたいという目的から制作した動画である。セリフや解説は一切ないが、茶室であることを明らかにするために、前述の沼尻宗真氏、海老澤宗香氏に演者になってもらい、小間でのお点前と正客を演じていただいた。富田勲「亡き王女のためのパヴァーヌ」(ラヴェル)が全篇に流れる印象的な動画となっている。冬の特別茶会「光と影の清寂」のモチーフでもある。

撮影：2021年(令和3)12月

演者：沼尻宗真、海老澤宗香

楽曲：富田勲「亡き王女のためのパヴァーヌ」(ラヴェル)

時間：5分55秒

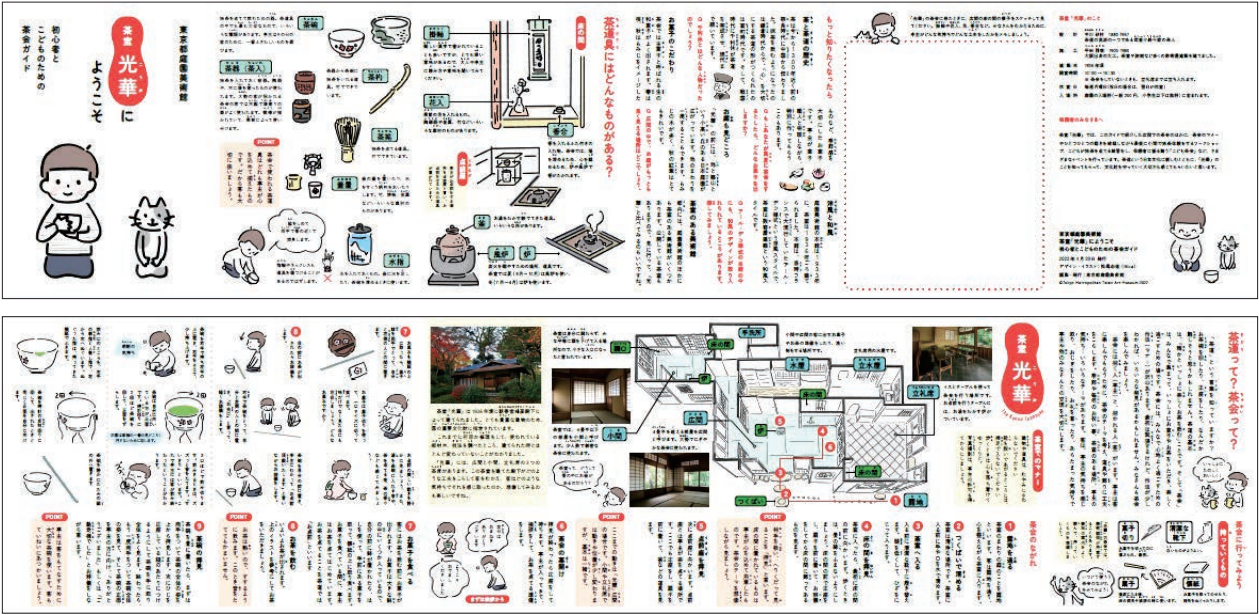
映像：株式会社らくだスタジオ

②「茶室「光華」によろこ 初心者とこどものための茶会ガイド」パンフレット

文字どおり初心者と子供を対象として、イラストとやさしい言葉で「光華」広間での茶会に参加するという想定で作成した6つ折りのコンパクトなガイドである。茶会への持ち物、簡単な作法、広間での茶会の流れ、お茶の飲み方、茶碗の拝見等のほか、茶道具の簡単な解説、ミニ知識、床の間のスケッチ等の内容である。茶会における作法は面倒くさく理解しがたいと思われがちであるが、その根底は亭主と客がお互いに相手をおもいやる心であることがわかるよう執筆した。「はじめてのお茶会」は、このガイドの実践編としている。茶室内で無料配布。

発行：2022年(令和4)4月29日(改訂：2023年(令和5)4月29日)

デザイン・イラスト：松尾由佳(Nica)



③重要文化財 茶室「光華」パンフレット

「光華」の解説パンフレット。4つ折りで、概要と平面図、立礼席、広間、小間、棧瓦葺、こけら葺、聚楽壁の画像と簡単な解説を付けている。茶室内で無料配布。

発行：2022年（令和4）10月10日

デザイン：smbetsmb



おわりに

茶室行事の参加者（「光華倶楽部」を含む）を除いた茶室入室者数は、令和5年度（4月～12月）の実績で59,437人である。また同期間に実施した茶室行事ののべ参加者数は350人であり、合わせて約6万人が「光華」を実見、あるいは行事体験をしていることになる。この数字が多いか少ないか比較対照する指標がないので評価しかねるが、同時期に本館・新館で開催された展覧会の入場者数は約14万人であることから、わずか85㎡の茶室の入室者数としては多いと言って良いだろう。文化財を公開し、茶室として活用し、多くの方に認知してもらうことでその保存継承を図るという目的に照らせば、一定の成果を上げていると考えている。今後も公開、活用を継続していきたい。

一方で課題も多い。行事等を担当する人員の問題は先に述べたとおりであるが、その他にも文化財建築の物理的な維持管理の課題がある。およそ90年前に建てられた木造建築は、2016年（平成28）の耐震補強とそれに伴う修繕工事により、今現在のところ目立った破損や劣化はない。しかし、ドロバチや雨水の跳ねによる外壁の破損、カビの発生、茶室を覆うような樹木の落ち葉による雨樋の詰まり、それを防ぐための清掃、シロアリの防除、木製建具の調整等日常的に注視し対処すべきことは多い。また、トークイベントの講師を毎年お願いしている小沢教授によれば、庇のむくりが大きくなっている、つまり庇が下がってきているのではないかと懸念の声もいただいた。「光華」の庇はこけら葺であるが、その杉板には銅板が被せられている。この銅板被せが建築当初からなのかはわかっていない。ただ、銅板のため、かなりの重量になるが、そもそも庇の設計、工法がその重量を想定したものなのかという疑問もある。これは経過観察をして、大きな破損や事故を未然に防ぐようにしなければならない。これらの課題については、現在別に進行している、「旧朝香宮邸（東京都庭園美術館）保存活用計画」策定のための検討、調査研究に包括されることを期待したい。

また文化財としての建築的な調査研究のほか、そもそも朝香宮が「光華」を建てた理由や経緯、竣工後の使用用途、吉田茂公邸の時代、迎賓館の時代、西武鉄道の迎賓施設の時代それぞれの用途など、およそ90年間の「光華」の歴史に関する調査研究も必須である。本館

については宮内省内匠寮の公式な記録や竣工時の写真などの一次資料のほか、後年の聞き取り調査、回顧録などを含めれば比較的資料があるが、「光華」については、前述した平田建設所蔵の竣工当時と思われる写真以外は、全くと言っていいほど資料がない、少なくとも未発掘状態である。その唯一の資料ともいえる竣工写真についても撮影年月日は不詳である。朝香宮家や朝香宮邸に関する後年の聞き取りや回顧録の中でも「光華」のことはほぼ触れられていない。それはつまり、施主であった朝香宮鳩彦王以外は、家族、関係者、研究者、そして美術館となって以降の学芸員も含めて「光華」に対する興味関心が極めて薄かったことを意味する⁸。しかし、茶の湯（侘茶）と皇族（あるいは公家、宮中）との歴史的な距離感を含めて考えれば⁹、皇族である朝香宮が自邸敷地内に数寄屋建築の「光華」を建てた意義、意味は決して小さくない。

「光華」の建築的、歴史的な調査研究を進展させ、その成果を一般公開や茶室行事を通じて発信していく意味は、本館における「建物公開」や企画展の開催と全く同様に極めて重要なことであり、美術館の使命と言える。繰り返しになるが、「光華」の文化財としての価値を認識し、調査研究を進展させ、その成果を一般公開やさまざまな茶室行事に活かし、より多くの方に「光華」の実見、体験をしていただき、それによって「光華」を保存継承していく意義や意識を向上させていくことが、最も大切なことなのである。

最後に、一言申し添えたい。茶室の公開及び行事を担当する筆者自身は、茶の湯の経験がない。また茶道史や建築も専門外である。したがって、とくに諸行事を実施する際には、茶人をはじめ研究者、大工棟梁、書家、陶芸家、菓子職人等、それぞれのプロフェッショナルに依頼することになる。プロである彼らは、常にこちらが期待している以上のパフォーマンスを見せてくれる。茶室行事では、当日の参加者にアンケートを行っているが、どの行事も大半が、というよりはほぼ全員が「大変満足」という感想を寄せている。それは、諸行事を支えてくれる方々が本当のプロだからであろう。そのプロの方々が一様に語るのは、茶室「光華」の価値であり素晴らしさである。文化財である「光華」の価値を共有し、公開や諸行事を通じて多くの参加者にもそれが伝わり、保存継承に繋がっていくことを

信じて、今後も「光華」を積極的に活用していきたい。

註

- 1 中川砂村（是足庵）1880－1957
武者小路千家の茶人であり、木津宗泉（茶室設計者、家元補佐役）の弟子として茶室の設計も行う。独立当初の平田雅也を指導しつつ、共に多くの茶室を建てている。
- 2 平田雅哉 1900－1980
大阪市に生まれ、小学校を中退して大工の道に入り、1918年（大正7）大阪の藤原新三郎棟梁に師事した。独立後は中川砂村と共に茶室を手掛けたほか、料亭、旅館、住宅等、数寄屋建築を数多く手がけた。
- 3 中村義明 1946－2022
中村外二工務店代表／数寄屋大工棟梁。1946年（昭和21）、大工の神様と呼ばれた中村外二の次男として京都市に生まれる。大学卒業後、中村外二工務店に入り、大工としてのキャリアをスタート。1970年（昭和45）、大阪万博日本庭園内茶室の新築工事を皮切りに、米国ニューヨークのロックフェラ邸（1972年）、松下幸之助邸茶室（1973年）、伊勢神宮茶室（1982～1985年）、京都迎賓館主賓室座敷（2006年）など、錚々たる数寄屋建築に携わってきた。俵屋旅館や菊乃井、和久傳など旅館や料亭との付き合いも長く、ひらまつの「高台寺十牛庵」開業の際、数寄屋建築の再生に携わった。
- 4 水澤工務店
1914年（大正3）水澤文次郎が東京・芝罘で創業。水澤文次郎は、進取の精神をもつ腕利きの棟梁であり、明治維新以降の西洋化・近代化による日本人の生活様式や住宅建築の変化のなかで生まれた「近代数寄屋」という新しい技法・様式を、自分たちの持ちうる技術と知恵・知識を注いでかたちにした。以来、吉田五十八、村野藤吾、堀口捨己、谷口吉郎などの住宅・茶室を手がけ、その精神を3代100年以上にわたり受け継いでいる。
- 5 「光華」の竣工年に関する考察は別稿を期したいと考えているが、これに関連する事項について簡単に記しておく。
まず施工した平田雅哉関係であるが、自伝である『大工一代』（池田書店、1961初版）の中では「戦時中の話だけど、昭和12年頃、朝香宮家の仕事をしたことがある」と書かれ、同書の年譜では「昭和13年（1938）朝香宮邸立礼席・座敷」と書かれている。また平田建設で発見された写真は台紙アルバム状になっているが、その表紙のフィルムのところに「東京都 目黒 朝香宮 茶席 設計中川砂村 工事平田雅哉 坪千円 昭和拾一年春」とマジックペンのようなもので書かれている。また、平田の晩年には平田が手掛けた建築に関する写真や図面を収録した作品集が出版されているが、そのなかに「光華」はない。実は、平田は「光華」はもう無くなっていると思っていたようである。作品集に収録されている平田の言葉を記しておく。

茶室のことでも、長年の協力者であった中川宗匠とも、思えばよく口論したものだ。（中略）藤原棟梁の縁で木津宗匠の仕事もしたが、中川さんは木津宗匠のお弟子さんで、独立後は中川宗匠の仕事が主であった。朝香宮家の茶室は中川宗匠の関係であり、青山御所の茶室は木津宗匠の縁であった。今はこの二つとも、すでになくなっていると思う。（平田雅哉・恒成一訓『数寄屋

造り 平田雅也作品集』毎日新聞社、1972）

「青山御所の茶室」とは、大正天皇妃であった貞明皇太后が1930年（昭和5）建てた「秋泉亭」のことである。「秋泉亭」は1945年（昭和20）2月、米軍の空襲により焼失している。この作品集が出版された1972年（昭和47）当時、現在の美術館の土地と建物（茶室等を含む）は西武鉄道の所有で、用途としては国の迎賓館として使用されていた時期にあたる。言うまでもなく「光華」は存在していたので、なぜ平田が「すでになくなっている」と思ったのかはわからない。平田自身がそのように思ったとしても出版・編集側が調べればすぐにわかったはずで、作品集に掲載されなかったことが今更ながら残念でならない。

次に、朝香宮邸の庭園設計者である宮内省内匠寮の中島卯三郎は、1956年（昭和31）の『造園雑誌』の中で、「茶室は昭和12年（1937）竣工」と記載している。

また、当時朝香宮と親交の深かった田中車輛（現・近畿車輛）創業者の田中太介の自伝『働く喜び』（1961）によれば、朝香宮家茶室の茶室開きは1937年（昭和12）2月19日とされている。しかし朝香宮が茶室を「光華」と命名したのは1937年12月とされており、命名することなく茶室開きをしたことになる。

一方、現存するモノの記録としては、2010年（平成22）の調査で「光華」屋根裏から棟札が見つかり、そこには「上棟式 昭和拾一年八月廿七日 宗匠 中川是足庵 大工棟梁 平田雅哉」と記されている。

また2017年（平成29）に、建築当初から存在していたと思われる立礼卓の修復を行ったが、それにあたり卓を解体したところ、天板の裏側、外見では見えないところに「朝香宮家 納 昭和十一年十月吉日大阪市西区阿波堀五-三 工匠 辻市松 作」と記されているのが確認された。

さらに、「光華」の扁額の背面には「昭和13年春 奉命 敏太刻」と刻印されている。

棟札、立礼卓に記されている年月日はおそらく疑いようがない。これを踏まえて、水澤工務店川嶋氏の1936年末か37年初頭に竣工して、1937年2月に茶室開きをしたならば整合性があるという見解は重要である（芹澤毅氏も同意見であった）。一方で、茶室開きの時に命名されていないことや、平田自伝の記述との相違については説明し難く、建築と竣工に関することについては今後も調査研究を進めたい。

- 6 神津朝夫『茶の湯の歴史』（角川文庫、2021）
- 7 「令和2年度 生活文化調査研究事業（茶道）報告書」（文化庁地域文化創生本部事務局、2021）
- 8 朝香宮家家族の聞き取りとしては、1998年（平成10）9月に華族資料調査委員会が次女の大給湛子さんに行い活字化した「旧朝香宮邸をたずねて」が非常に参考になるが、この中でも「光華」に関する質疑は行われなかったようである。ただ、朝香家に残された「ご紋付天目台」に関連するコラム記事の中で、茶に関する湛子さんの話が掲載されている。

私は当時、江戸千家のお茶を習っておりました。お茶室「光華」の茶室開きのときは、秩父宮様をはじめ宮様方をお招きして、お薄をたてて天目台に乗せてお出し、召し上がって頂いたことを思い出します。

ちなみに、遠山記念館依田徹氏の著書によれば、この茶室開きのときに朝香宮殿下の代点を行ったのは、江戸千家の式守蝸牛とのことである。

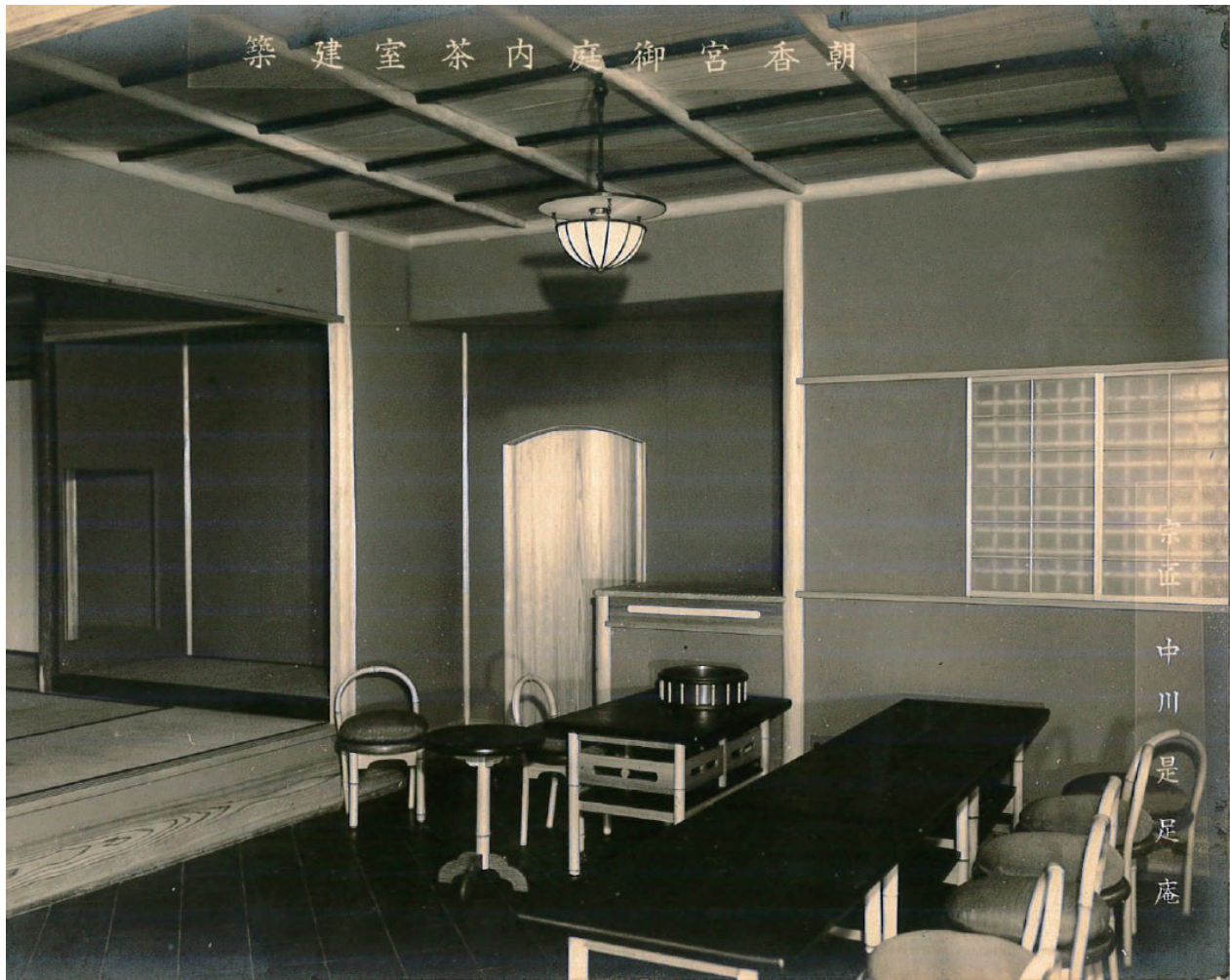
9 皇室、公家、宮中等と茶の湯に関する研究としては、以下を参照した。

谷端昭夫『公家茶道の研究』（思文閣出版、2005）

依田 徹『皇室と茶の湯』（淡交社、2019）

廣田吉崇「近代における茶の湯家元と天皇との距離－天皇・皇族への献茶にみる家元の社会的地位の向上－」（国際日本文化研究センター「日本研究 44 77-130」、2011）

非常に大雑把に要約すれば、千利休以降の「侘茶」は武家の文化であり、その精神性や住環境を含めて、皇室や公家の嗜好に合わなかったのではないか、それゆえ、茶の湯は朝廷儀礼に準ずるものと認識はされていたが、素養と個人的な興味の範囲で捉えられる部分が多く、和歌における冷泉家や蹴鞠における飛鳥井家のごとく茶の湯を家職とする公家は存在せず求心力に欠けた、という見解である。その流れで言えば、ではなぜ皇族である朝香宮が「侘茶」のための茶室「光華」を建てたのか、という命題について考察する意味は十分ある。



平田建設所蔵アルバムより、竣工時と思われる「光華」立礼席。この立礼卓と椅子は現存している



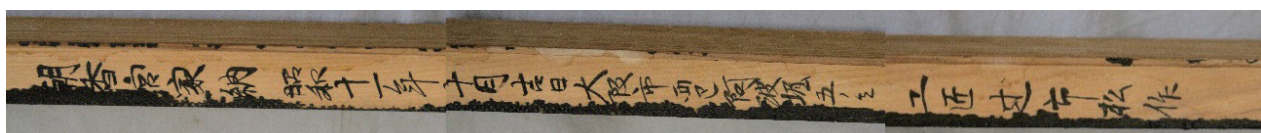
平田建設所蔵アルバム表紙



棟札



扁額背面



立礼卓 墨書

編集後記

東京都庭園美術館紀要2023は、当館の2名の学芸員による論考を掲載します。

まず、広報担当であった斉藤音夢による一つ目の論考は、開館40周年を機に行った公式ウェブサイトの大規模リニューアルについて、実施者としてその経緯を詳細にまとめたレポートです。リニューアルに当たり、昨今のウェブサイトに求められている「機能性」と、館の特色である「装飾性」との共存という難題に果敢に挑んだ様子がうかがえ、今後のウェブサイト運営の指針を示す内容となっています。

次に、事業担当係長を務める板谷敏弘による二つ目の論考は、当館の日本庭園にある茶室「光華」について、館事業において積極的に公開、活用している状況について述べたものです。2023年度から本格実施した「光華倶楽部」等により、幅広い利用者に文化財としての価値を伝えとともに、保存継承への理解を促す執筆者の思いが伝わってきます。

それぞれの調査研究が、当館の今後のさらなる発展に寄与することを期待します。最後になりましたが、本紀要制作にあたり、多くの方々のご尽力を賜りました。ここに納められた原稿執筆にあたりご尽力賜りましたすべての関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

（東京都庭園美術館 岡本純子）

東京都庭園美術館 紀要 2023

発行日：2024年6月24日

編集：東京都庭園美術館

制作：株式会社石井印刷

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都庭園美術館

〒108-0071 東京都港区白金台5-21-9

Tel: 03-3443-0201

The Bulletin 2023 Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

June 24, 2024 Edited by Tokyo Metropolitan Teien Art Museum

Produced by Ishii - Printing Service

Published by Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture

Tokyo Metropolitan Teien Art Museum © 2024

5-21-9 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-0071 Japan

Phone 03-3443-0201

Printed in Japan